
四大天使の秘宝

仁愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四大天使の秘宝

【Nコード】

N 6 6 9 3 H

【作者名】

仁愛

【あらすじ】

世界で四大海賊王の一人と恐れられた。「ティナ・ブラッド」船長の航海記録より、ログブック真実が明かされます。

序章「旅立ち」

四大天使の秘宝

序章「旅立ち」

青い空、白い雲、輝ける太陽、そしてエメラルドグリーンの海、大きな風をマストに受け、海賊船「ルシフェル」が世界の1/5を占める、ガニシャ大陸の東方の島国に辿り着こうとしている。

マストの天辺に登り、風を一身に受けて海鳥と戯れている少年がいた。この希望に燃えて好奇心旺盛の彼の名は「ティナ」。後に「ティナ・ブラッド」の名で、四大海賊王の一人として世界に名を轟かす事になる。

これは四大海賊王「ティナ・ブラッド」のログブック（航海日誌）を元に、四大天使の秘宝を求め世界中を駆け巡った歴史の記録である。

彼は赤髪に黒い目を持っていた。生まれ故郷であるガニシャ大陸の西の端「ポートギース国」の小さな港町「パース」では、東洋と西洋の間の子としてよく虐められていた。

もともとティナは孤児である。港町に珍しく冬の吹雪が吹き荒れるさなか、海岸近くにある教会の玄関の前にバスケットの中に入れられて捨てられていた。

赤子の左手首には、黄金のブレスレットが嵌められていた。そのブレスレットには、「火」をイメージさせるマークがあり、その反対側には「ティナ」と書かれていた。その子を見た、フィリップ神父は「運命」を感じ温かく教会に向かい入れて育てたのである。

彼の左手首についているブレスレットは、鋭利な刃物やノコギリなどで切っても切る事が出来なかった。このままでは赤子が成長する過程で、腕が圧迫されて死んでしまうと考え悩み続けましたが、神父の心配をよそにそのブレスレットは子供の成長に合わせて、大きくなっ行ってたのである。

フィリップ神父は、この子は「天使」の使いだと喜び育てた。その他にフィリップ神父がティナを大切にした理由はブレスレットにかかっている「火」のマークである。それはあの四大使の一人「ミカエル」を象徴したマークと一緒だったからだ。まさに神父にとってティナは「ミカエル」の生まれ変わりだったのである。

しかし、それは小さな古ぼけた教会での話。町に出れば赤い髪に黒い目の異端児として扱われ、町の子供達に虐められていた。ブレスレットの話も、住民に取っては気味悪い話である。ある。勿論、友達もいない。

ただ一人、近くの酒屋の娘で、教会にお祈りに来ている金髪で綺麗なエメラルドグリーンの眼を持つ同い年の少女「リリー」だけがティナの友達だった。

「リリー」とはいつも一緒、お祈り・勉強・食事・掃除などいつもフィリップ牧師の言い付けは二人で行動した。兄弟がいない二人は、お互い兄弟のように思っていたのだ。

ある日教会で結婚式が行われた。祝福されている夫婦の隣でティナはリリーに、町の闇市で買ったオモチャの指輪をリリーの左手薬指にはめた。

「結婚しよう」ティナはリリーにプロポーズした。
リ「ぶかぶかで落ちちゃうよ」リリーは怒っていたが、いつも大事に首にかけて持っていた。

そんな彼らが十歳の時の秋。その日はティナとリリーは二人で「

ミサ」で必要な、花束を集めて海岸通り歩きながら教会に向かっていました。

すると海岸近くに「黒いマストにドクロと鎌が描かれる」大きな帆船が停泊していた。

「海賊だわ！」

リリーが青ざめた表情で叫んだ。

丘に聳え立つ教会を見ると黒煙と共に火の手が上った。

「教会が…フィリップ司祭！」

ティナは叫び駆け出して行った。

教会には二十人程の海賊が荒らしまわり火を放っていた。燃え盛る炎、その前にフィリップ神父は倒れていた。司祭の前に一人の男が大きな鎌を持ち、欲望に飢えた目をして立っていた。

「フィリップ神父！」

ティナは叫び駆け出した。

「来るなティナ…逃げる！」

声を絞り出して叫ぶ神父の肩に大鎌がグツサリと刺さり、そのまま背中まで大鎌で切り裂いた。

「ミカエルの秘宝はどこだ？」

痛みで呻く神父の髪の毛を掴み引つ張り上げ、その男は神父に話しかけた。

「…」

もう神父は血を吐きながら言葉にならない。。

「ならそのガキに聞いてみようかな？ゆつくりと…」

海賊がティナに近付いて行った。

「やっ…やめろ！」

フィリップ神父が叫ぶがもう声にならない。恐怖で動けないテナに海賊がゆつくりと近付いていった。その時である一本の弓が欲望に塗れた海賊の左目に刺さった。

海賊の叫び声と共に、一人の男が話しかけた。

「えげつない事するな…大鎌のマフィー！その欲望に塗れたその目は少ない方が丁度いいぜ」

「赤毛のブラッド！」

マフィーと呼ばれる海賊は憎しみを持った声で叫んだ。

森の前に炎によって、金髪の毛が赤色に照らし出されている青い目の男が立っていた。

その直後、二十人もの武器を持った大男達がブラッドの後ろの森の中から大声をあげて、大鎌のマフィーの手下に襲いかかった。

「こんな所まで来て殺しとは狂っているな」

ブラッドはマフィーに話しかけた。

「うるさい！俺は欲しい物はすべて貰う。海賊だからな、お前も海賊なら同じだろ！」

刺された左目を抑えながら、マフィーは叫んだ。

「何が欲しい？ミカエルの秘宝か？残念だったなここには無い。無駄足だったな。ただ目の代償は払ってもらうぞ！」

マフィーは大鎌を振り上げて襲い掛かった。

その時、大砲が海賊めがけて発射された。『ドカーン』『ドカーン』という音と共に、海賊船『死神^{デス}』が攻撃された。『海軍だ！ヤバイ逃げろ』という声がこだました。

リリーが町に戻り、この事態を警察に説明して、補給で入港して

いた海軍を動かしたのだ。

「チツ！この借りは返すぞ」マフィーは捨て台詞を吐き、手下を引きかえさせた。船に戻り海軍と大砲を撃ち合いながら頃合いをみて海賊船は去って行った。

その間ティナは既に息絶えているフィリップ神父に抱きつき泣き叫んでいる。

「お前はずっとここにいるのか？」

ブラッドは赤毛のティナとプレスレットを見てティナに話しかけた。

「うるさい海賊はみんな一緒だ。神様に天罰を与えられるがいい」ティナは神父から離れられない。

「そうだな、俺たちは汚れた世界にいる。そんな汚れた俺たちが世界に散らばっていると言われる、四大天使の秘宝を今探している。海賊の俺たちが天使を探しているとは笑わせるが、そこに尽きる事のない夢がある」

「おかしら海軍が対岸の俺たちに気づいたらマズイ。行きましょう。」

部下がブラッドに駆け寄った。

「よし引き揚げるぞ！」

ブラッドは掛声をかけた。その場から去ろうとするブラッドにティナは話しかけた。

「その四大天使の秘宝は、さっきの海賊も狙っているのか？」

「ああ」ブラッドはそう言って森に向かって歩き出した。

「明日の朝には俺達が発する。」

ブラッドは振り向きもせず森の中へ歩いて行った。

リリーと町の人達が駆け付けたのはその直後だった…。

夜中に教会の隣の墓地に、一人でティナは土を掘った、涙を流しながら10歳の子供がスコップで掘り続けた。明け方には木で作った十字架を立ててお墓が完成していた。

「神父もう僕には、帰る所がありません」

「でもいつかここに帰ってきて、大きな教会を建てます。神父に喜んで貰えるように…」

「ありがとうございます」

朝日が昇り、ティナとフィリップ神父の墓を照らし出した。

ティナの瞳にはもう涙は無い、その代わり瞳には「決意」の炎が灯っていた。

「行ってきます」

ティナはフィリップ神父のお墓を背に全力で駆け出した。

酒屋『海の女神』の二階がリリーの部屋だ。ティナは二階にこっそり駆け上り、窓際に一枚の紙を残した。

ただ一言「待っていて」と…。

「お頭行きましょうよ」

海賊船『ルシフェル』のクルーは叫んだ。

「分かっている、少し待て」

ブラッドはブリッジの上で森を見ていた。しかし少し待ったが、ブラッドは号令をかけた。

「よし出港だ、帆を張れ！」

「おゝい！待ってくれ！俺を乗せてくれ！」

叫び声にブラッドが振り返った。ティナが船に向かって走ってきて

いる。

「小僧、お前は何を望む！」

息を切らしながら辿り着いたティナにブラッドが問う。

ティナは息を切らしながら、少し考えて答えた。

「自分が生まれた意味を知りたい」

それは前々から気になっていた。「ブレスレット」の存在も…。

ブラッドはティナの瞳から決意の光を見た。

「帆を張れ、ついて来られなかったら海に捨てる！」

ブラッドはティナにつけてブリッジに戻って行った。

「はい！」

ティナは海賊船『ルシフェル』に乗り込んだ。

これが四大海賊王「ティナ・ブラッド」の冒険の始まりである。

五年後…ティナは東方の島国に向っている海賊船『ルシフェル』のマストの上にいた。

ルシフェルはガレー船としては最大級の1千トンを超えるガレオン型の船で、白いマストに黒いドクロと六枚の天使の羽が画かれた海賊船『ルシフェル』は他の海賊・海軍にとっては恐れられていた。しかし、ティナにとっては『家族』がいる唯一の『家』なのだ。

「陸地が見えたぞ〜！」

ティナは、ワクワクしていた。黒い目を持つ彼には、半分東方血が入っているのではないのか？と思っていたからだ。

そしてティナはマストの上で、海風を受けながら、これからの冒険に胸を躍らせて異国の大地を見つめていた。

次回「赤毛のブラッド海賊団」

キャスト

ティナ… 赤髪に黒い目を持つ少年、この物語の主人公

リリー… 金髪にエメラルドグリーンの目を持つ少女、ティナの幼馴染

ブラッド… 『赤毛のブラッド』として、海軍・海賊に恐れられている。

『ルシフェル』の船長

マフィー… 『大鎌のマフィー』の異名を持つ海賊。海賊船「死神^{デス}」

の船長

第2話「赤毛のブラッド海賊団」(前書き)

赤毛のブラッドとの出会いから五年。

一回り大きくなったティナが新しい冒険にでる。

力強い家族「赤毛のブラッド海賊団」と共に。

第2話「赤毛のブラッド海賊団」

四大天使の秘宝

第二話「赤毛のブラッド海賊団」

東方の島国『ジャンパー』に近づくに連れて、クルーも慌しくなってくる。ただ陸地を見つけただけでは上陸しない。入港前に情報を集めるのも必要な作業だ。

島国と言っても『ジャンパー』は広い。秘宝の有りが分かる有力な情報が入る土地に行かなければ、かなりの無駄足になってしまう。

しかも東方の島国『ジャンパー』の情報が極めて少ない。ガニシヤ大陸最大帝国『シン』の近くの島国というのに、いまだに征服されていないのだ。回りの国々が統合されているのに、島国というだけの理由では説明が付かない。何か秘密があるのであろう。ブラッドは考えていた。

近年ポートギース国の商船が、ジャンパーに入港した際に、船長の『マルコ』が黄金に輝く『棺』を担いで神殿に向う行列を発見した。その棺の神々しさに感激したそうだ。その後、マルコは黄金の棺について調べ『黄金の国ジャンパー』という著書を書いて、ポートギース国に伝えた。

その一文に「黄金の棺には神を表わす太陽のマークが画かれていて、中には『三種の神器』が収められているとして人々は崇めていた」マルコ船長の著書に書いてある。

その棺は二十年に一度、神殿の建替えのために、新しい神殿が出来上がるまで『天皇』がいる『京』の都まで運び出されると著書に書かれていた。

それからマルコ船長が『ジャンパー』で、黄金の棺を見てから今

年でちょうど二十年目となっていた。

ブラッドは、『黄金の都』『黄金の棺』『太陽のマーク』『三種の神器』が気になり、ちょうど二十年目ということで、『ジャンパー』に向ったのだ。

天使とはかけ離れている異教徒の文化である。部下達には反対されたがブラッドの好奇心が勝ってしまったのであろう。ブラッドは舵を東方の島国に向けたのであった。

情報収集係として、二等航海士『スカー』、ドクター・副通信士『ヒューベリック』、副コック長『パリス』そして、航海士見習い『ティナ』が選ばれた。

ここで少し『赤毛のブラッド海賊団』のクルーを紹介しておこう。

船長は『赤毛のブラッド』、剣の達人で二本の剣を疾風の如く扱い切り裂く『二刀流』の使い手。彼の異名が付いたのは、二百人も海軍を一人で疾風の如く切り裂き全滅に追いやった事件により伝説になった。その時に敵の返り血が髪にかかり、金髪の髪が赤く染まっていた事で『赤毛のブラッド』として間違って伝説が広まったのである。当の本人は笑いながら「みんな赤毛だと思っているから、町を歩いて遊んでいても気が付かないからラッキーだな」と喜んでいる。ティナを乗せたのは、自分に無い赤髪の少年に興味を持ったのである。因みに船長が赤毛になっている所を見た乗組員は少ない。何故なら『最強の軍団』がブラッドが出る前に、敵を片付けてしまっただけである。船長の出番が殆どない。

船長の傍らでいつも付き添っているのが、副船長であり奥さんの『ティアナ』である。森の種族と呼ばれる『エルフ』の女性で、年は三百歳位だと言われている。千年は生きると言われるエルフにとって、三百歳はまだ若い部類であらう。本当の年齢を聞くと、容赦

なく海に放りこまれると噂が流れていて誰も聞かない。

ブラッドが船長になる前に出会いずと傍にいる。

精霊の魔法を得意として、特に風の妖精『シルフィー』や『ウィンディー』を呼び寄せる事が出来る。ただ海の上に森の種族である。結構大変である。超巨大ガリオン級の帆船である『ルシフェル』のブリッジの後ろに巨大なガラスハウスを作ってしまったのだ。そこは属名『緑の館』と呼ばれ、中に小さな森を作ってしまったのだ。風の妖精『シルフィー』をお願いして風の結界を作って守っている。野菜が取れてコックは大喜びだが、他のクルーは邪魔で文句を言っていた。

しかし別の海賊船団と戦いになった時、敵の大砲が『シルフィー』の結界を破り『緑の館』が崩壊した事があった。怒ったティアナは、炎精霊『イーフリート』に風の精霊『ウィンディー』を呼び寄せ、一瞬にして辺り一面を火の海した。三隻もの巨大海賊船を海の藻くずにしてしまったのである。それ以来誰も『緑の館』の文句を言うクルーはいない。

彼女の凄いのは、他に『経理』として才能があるという事だ。森の精霊で自由気ままなエルフであるが、ティアナは他のエルフとは違った。荒くれ者の『学』の無い海賊だけでは、いつも火の車（火の船）である。財宝の整理・分配、航海日数に合わせた仕込み、役割のスケジュールなど、すべてティアナの担当になっている。しかもティアナが恐いので誰も文句を言わない。

組織の編成など、ブラッドが行ったが、経理・会計などはティアナのお陰で管理されて秩序が守られている。

次に五人衆と呼ばれる最強の戦士達を紹介しておこう。

彼らは幹部だ。その一人が一等航海士兼最強の剣士『バージ』。ブラッドの幼馴染で、一緒に剣術を習っている。ブラッドの旅の最初のパートナーである。『流星のバージ』の名で恐れられている。彼の突きは、一度に流星の如く飛んでくるらしい。敵が殆ど生きて

いない為、どれ程の突きがくるのか？分からないらしい。弟子の二等航海士『スカー』は一度バージと本気で手合わせしたが、かわしきれずに顔にキズを負った。それ以来二度と手合わせしたくないようだ。

バージは航海士として約三十人の部下を纏めている。帆を張り、風を読み、海流を読んで、巨大ガリオン級『ルシフェル』を動かしているのだ。因みにティナは航海士見習いで属している。

二人目が甲板長の『ゴルディバ』だ。身長230cm、体重170kg巨漢で、時折巨人族と間違われる。巨大なアックス（斧）を片手に、敵を真つ二つにする。弟の『ゴンゴ』は副甲板長を勤め、兄同様巨漢である。二人がアックス（斧）を持って立っていると、誰も近づけない。

ただ彼らは優しい。小動物が好きで、サルやうさぎや小鳥などを飼っている。甘いものが好きで、フルーツなどには目が無い。しかも新しいものの好きで現代のコギヤルなどと差ほど変りは無い。

しかし彼らの別名は『狂戦士』^{バサカー}である。一旦、戦いを始めると誰も近づけない。彼らの歩いた後は、死体しか残らないのである。荒くれ者の多い甲板員だがこの二人には何でもしたがう。

悪戯好きのサルが、野放しになっているのは言うまでもない。

甲板員は組織の中では一番人数が多く約四十名いる。甲板の整理・整備などを任されているが、一番の仕事は風が無い時に、一成にオールを漕いで巨大船を動かす。四十名以上の巨漢達がオールを漕ぐ姿は圧巻である。

三人目は砲撃長『スチワート』である。名前は優しいし、いつもオチャラケテいる。しかし射撃の腕は世界一と言っても過言ではない。銃・弓・大砲など飛び道具には、絶対的な自信がある。また新兵器の作成が大好きで、いつも変な武器を作ってくる。海軍の大艦隊を目にして、新兵器のライフル銃を試し撃ちをして、五隻の艦隊

のすべての船長を狙い撃ちた。驚いた海軍は直ぐに撤退させた。副砲撃長の『ニック』といつも変な新兵器を開発している。しかし艦隊戦となると、三十人の砲撃手を従えて、敵を殲滅してしまう。

四人目は、通信長兼ドクターの『マシユー』である。魔法使いである。黒魔法、白魔法など最高位の実力を誇っている。現代には通信機器が揃っているが、この世界ではまだ機械が発展していない。その代わりに、町の「魔法グッズ」の店には、通信用の魔法増幅器が売っており、魔法使いはこれにより交信している。海軍などでは魔法使いを配属している艦隊は多いが、海賊として魔法使いを雇っているのは『ルシフェル』が初めてだろう。これにより『ルシフェル』は情報を征し、最強の戦艦として数々の海賊船を沈めていったのだ。

ただ、普段は余り出番がないので、乗組員の健康管理をするドクターとしての役割の方が大きい。しかし助手の『ヒューベリック』が白魔法と薬学が得意な為、ほとんど彼に任している。彼とティアナと協同で作っている「薬」のお陰でマシユーの出番が無いからである。

仕事をヒューベリックに任せて、彼はいつも部屋にこもり新しい魔法の研究をしている。一度マシユーの部屋が大爆発を起こし大惨事となった。新魔法の失敗である。その時にティアナの「緑の館」をもう少して、吹っ飛ばすところであった。回りのクルーは、『魔法』と『精霊』の大戦争になると思い巻き込まれるのを恐れて避難した。

そんなお茶目な大魔法使いは、約二十人魔法使いを育成しており、戦いとなると最強の魔法軍団として海賊団を守っている。

最後の五人目は、コック長にして最強の武術家、『劉^{リウ}』である。ガニシヤ大陸最大帝国『シン』の皇帝の三十六番目の息子である。なんと皇太子である。それが何故かブラッドとの出会い、彼に惚れ

込み、海賊船に乗りそしてコック長になっているのであるからありえない話である。

劉家は代々『シン』の辺境の土地の一国でしかない。劉は皇帝の息子といえども余り力を発揮しない。母は人質として宮廷に入り、そこで皇帝に作らされた子供が劉なのである。因みに腹違いの兄弟が五十二人いる。本当の弟が一人いるので、彼は国を弟に任しブラッドについて行ったのである。彼には国のあり方など、退屈以外何物でもないのです。

劉の武術師匠は、亀仙人と呼ばれる老人で、小さい時から武術修行に明け暮れていた。「シン国」での武術大会で、シン国軍最強の軍団長を一瞬のうちに打ちのめした。その逸話がシン国全土に広がった。評判は評判を呼び、最強の皇太子として第一位王位継承者を脅かしていた。しかしブラッドと出会い、世界の面白さを知った。そしてたった一日で祖国を弟に譲り、海に出たのである。

初めて船に入り食事をしている時に逸話も残っている。余りにもマズイ料理に頭にきた劉は、当時のコック長を殴り飛ばし自分が料理を作り出した。するとなんと豪華で美味しい料理が次々と出来上がったのである。劉は宮廷内にて、最高の食事を食べている、最高のグルメでもあった。そして料理人として頭角を現し、現在では二十人以上も弟子を使って百人以上もいる『ルシフェル』のクルーの胃袋を満たしているのだ。ティナは同じ目を持つ劉が大好きである。因みに殴り飛ばした、前コック長「パリス」は現在副コック長として働いており、劉の崇拝者となっている。料理人達は、劉に料理・武術を教わり、最強の戦うコック集団として組織されて行った。

このように世界中の海軍・海賊が恐れる『赤毛のブラッド海賊団』は、船長ブラッドの元で組織化されている為、少数ながら最強を誇ったのである。経理もティアナが仕切っている為、無駄が無い。現代という大手大企業を打ち負かす、やり手の中小企業の社長のようなのである。三百人もの人手がいる、ガレー船最大級のガリアン型の海

賊船『ルシフェル』をたつた百数十人で操っているのだから、組織力は桁外れにずば抜けている。

彼の實力・組織力もさる事ながら、最強の五人衆を引き連れる辺り、彼は結構人垂らしである。彼の包容力・強さ・優しさ・気配りなどは、ワンマンな海賊とは一線を引いている。しかもブラッドは海賊ではあるが、盗みや強奪などは一切やらない。宝探しが好きな少年のような男なのだ。だから人が付いてくるのだろう。毎日ワクワクしながら行動している。そしていつの間にかクルーは彼のペーイスに引きずり込まれて行くのだ。男として、魅力的である。ティナも初めて出会った時に、彼の一言で突き動かされた。ブラッドはそういう男だ。

情報収集に向けて小船を用意して乗り込んだティナとスカーとパリスとヒューベリックの4人の元に副砲撃手のニックが駆けつけた。「砲撃長が面白い素材が無いか見て来いってさ。乗せてくれ」
乗り遅れると思いニックが慌てて伝える。

「えゝニックが来るといつもガラクタだらけになるじゃないか？」

「ガラクタとは失礼な。新兵器の部品だ」

ティナの質問に、ニックは苦笑いをした。

「俺たち情報を取りに行くだけだよ。次に上陸した時でいいじゃないの？」

「バカだなゝこんなものは速めに情報を集めたほうがいい。ここは黄金の国だ！何があるか分からない」

「連れてやれ。」

二人のやり取りに、二等航海士のスカーがティナに言う。上司であるスカーに言われると何も言えないティナ。しぶしぶ了解した。

「それじゃゝ黄金の国探索にいざ出発！！」

何故かティアの号令で小船は出発した。

次回「黄金の国」をお楽しみに

キャスト

ティナ…赤髪に黒い目を持つ少年、この物語の主人公

ブラッド…「赤毛のブラッド」として海軍・海賊に恐れられている。
海賊船「ルシフェル」の船長

ティアナ…海賊船ルシフェルの副船長兼経理担当。森の種族「エル
フ」にしてブラッドの妻

バージ…五人衆の一人。ブラッドの幼馴染。一等航海士として舵を
任されている。最強の剣士

ゴルディバ…五人衆の一人。甲板長。巨漢ながら性格は温厚。ただ
し戦いの時は狂戦士となる

スチワート…五人衆の一人。砲撃長。最高の狙撃手。新兵器開発が
趣味

マシユー…五人衆の一人。通信長兼ドクター。白・黒魔術の最高位
の魔術師。趣味の新魔術の研究

劉^{りゅう}…五人衆の一人。コック長。武術の達人。その正体は、シン国の
皇太子。

スカー…二等航海士、バージの弟子。槍術の達人

ゴンゴ…副甲板長、ゴルディバの弟。兄と同じ巨漢で狂戦士。

ニック…副砲撃長、狙撃手。スチワートと同じで新兵器開発が趣味
ヒューベリック…ドクター助手。白魔法・薬学の権威。マシユーが

研究ばかりしているので彼が働く

パリス…副料理長。武術家。劉^{りゅう}を崇拜している。

第3話「黄金の国」(前書き)

ジャンパーに上陸した「ティナ」達は、異文化に驚きながらも楽しんでいたが・・・。

第3話「黄金の国」

四大使の秘宝

第三話「黄金の国」

小舟に乗り、航海士見習『ティナ』と二等航海士『スカー』、副砲撃長『ニック』、ドクター『ヒューベリック』、副コック長『パリス』の五人は、黄金の国『シャンパー』に上陸した。

しかし上陸したと言ってもここがどこなのか？お宝がどこにあるのかも検討が付かない。しかたないので近くの町を探し、地図と情報を得ることにした。

しかしここは東方の異国、言葉も違うし、外見も違う。少々心配である。

だが彼らは世界を渡り歩いている海賊である。いつも度胸とジェスチャーと勢いで乗り切っている。

ただ詳しい情報を得るためにはそれでは困る。その為に魔術師であるヒューベリックが上陸したのである。何万冊もの本を読んでいる彼ら魔術師は、語学にも優れており数十カ国語に精通しており、古代文字も読むことが出来る。以前、ジャンパーの『陰陽道』という符術の研究で勉強をしたと言っていたので、彼が情報収集が係として任命されたのである。

その他は護衛であるが、スカーは『サムライソード』が欲しいやら、ニックは新兵器の部品が欲しいやら、パリスは食材探しと動機がかなり不十分である。ティナは持ち物係である。

五人は近くの『大鷲』という港町に辿り着いた。港には大きな漁船が立ち並び、市場は活気が溢れていた。回りの魚屋や料理屋には

人が集まり、関連業者が所狭しと並んでいた。その先には遊郭街があり、夜になると『酒』と『食事』そして『女』と盛り上がるのであろう。ニツクはもう夜の事を考えていた。

一次産業が発展して、関連の企業、町・住民が潤う地方活性化のサイクルが出来ているいい町である。これはいい町を見つけたと思った。ただこの港には大き過ぎる『ルシフェル』の入港は無理だろうと思い情報収集だけに努めることにした。大型の船が入れるように整備すればもっと、発展する町だろうと話合った。

しかし東方の人間は小さい。大柄で金や赤の髪を持った異人は目立ち過ぎる、すぐに注目の的である。一行は取り合えず宿をとり、情報収集にあたろうという事になった。

宿を取った後、各自情報収集に当たった。だが他の三人は異国の珍しい物を買いたさにいき、ヒューベリックとティナの二人が情報収集に当たった。

「ちえ！やっぱあいっら遊びに行ったよ。俺たちただだよ、情報を探しているの」

「彼らは彼らなりに地元の人間と触れ合い、地元の国民性を見ているですよ。それが情報となるのです。それは表には出ませんが、重要な情報ですよティナ」

ヒューベリックがティナを戒めた。

「そうなのかな・・・俺には遊びに行っているとは思えないよ？」

「そのうちティナが大きくなればわかりますよ」

「そんなものかな？」

「そんなものです。じゃー地図を探して情報を集めましょう」

ヒューベリックとティナは地図を購入して、『現在地』と『京都』の位置、そして『三種の神器』が納められているとされる『伊予』の国を調べた。

ちょうど今年は二十年に一度の神殿の建て替えの年である。三種の神器は京の都の天皇の元に移動しているとの事が分かった。ブラッドの言っている事は当たっていたのだ。

一カ月後に都から伊予に向って三種の神器が移動されるらしい。その警備には將軍直属の精鋭部隊が一万入引連れて警護に当たるようだ。

「凄い警備だね。よつぼどの宝だね」

ティナは目を輝かせたが、ヒューベリックは胸騒ぎがしていた。

集合の時間に宿に戻ると、部屋には誰もいない。あるのは『サムライソード』とガラクタの山、それに見たことの無い果実だ。

「ヒューベリック。これが情報収集なの？」

ティナが言くと「ははは」とヒューベリックがわらっていた。

案の定三人は遊郭で既に酒を飲みバカ騒ぎしていた。ただでさえ異人で目立つのにバカ騒ぎしていれば、すぐにわかる。

「おい。ここだ」

ニックが叫ぶ

「もう飲んだの、情報収集は？」

「やってきたぞ」

ニックが酒を飲みながら言っている。

「あのガラクタとサムライソードと果物はなに？」

「ははは、あれは流れ。」

ニックは高笑いである。まあ何十日と海の上にいて久しぶりの陸である。気持は分らないわけではないので、それ以上突っ込まない事にした。

「情報はわかったか？」

スカーの一言で本題に入った。もちろん酒を飲みながら。ヒューベリックは一通りの情報を伝えて、他の三人の意見を待った。

「その三種の神器とはなんなんだ」

「情報によると、彼らの太陽の神様がこの国に使わした神器らしい。剣に勾玉に鏡の三つだそうだ」

ニツクの間にヒューベリックが答える。

「その太陽の神様が、四大天使の秘宝と関係あるのか？」

「分らない火を表す『大天使ミカエル』と『太陽神』は近い感じもするが・・・難しいな」

パリスの間にヒューベリックが答える。

「ブラッドが興味を持ったのだから、俺たちは動くまで、それに今まで秘宝じゃなくてもたんまり財宝は手に入っただろう？」

スカーが他の四人に言い聞かせた。事実、世界中で四大天使の秘宝を手にしたものはいない。伝説だろうとあきらめている海賊が殆どである。しかしブラッドは情報を頼りに、世界中を冒険している。

四大天使の秘宝探しの副産物として、他の宝を発見して金銀財宝を集めている。その財宝管理を經理のティアナが平等に分配管理しているため、ルシフェルは經理上大黒字である。クルーからも文句が出ないのだ。経営の神様である。

「それではまずは伊予に向って、三種の神器の奪取のための計画を練らないと」

「伊予は大きな町ようで、ルシフェルが入港出来るかもしれない。明日戻りブラッドに伝えよう」

「話は明日だな。今日は飲むぞ。黄金の国と聞いて期待したが、黄金などどこにもない。ただ東方の女は魅力的だ、綺麗な黒い髪に黒い瞳はたまらない」

酔っ払いのニツクが話を終わらせる。

「でも言葉は通じないじゃないか？」

「男と女は言葉はいらない、目と目が合わさりボディータッチがあれば会話が出来るのさ。ティナにはもう少し先の話かな？」

「またバカにして。」

ティナは拗ねたが、リリーの事を思い出し赤面していた。

その楽しい晚餐を繰り広げている一行を、建物の暗闇から見つめる二つの眼が不気味に光っていた。

その事にまだ誰も気付いていなかった。

朝まで飲み続けていた一行は、昼ぐらいにようやく頭を抱えながら起きて宿を出発した。大量のガラクタの荷物を持たせて、ティナはブツブツ文句を言っていたが、航海士見習の彼は文句が言えない。ハリスなどは、自国にはいない『鰹』という魚を大量に仕入れて引きずっている。生臭いったらありやしない。と思いながら一行は重い荷物を持つて小舟を停泊している岸にむかった。

森に入った頃に、スカーが小声で四人に伝えた。

「つけられている。」

五人に一気に緊張が走る。相手は何人だ？何処にいる？神経を研ぎ澄ませながら前に進む。

「私が動揺を誘います。気配を感じて捕まえて下さい。」

ヒューベルトは呪文を唱え始めました。すると「さんさん」と照っていた太陽が陰り、森一面が霧に包まれました。『フォグ（霧）』の呪文である。それと同時に、スカー、パリス、ニックは三方向に飛んだ。

敵が動揺するのを待つのである。

一行の後をつけていた男は、突然の霧に案の定動揺して動きが乱れた。その瞬間、一番近くにいたスカーが、買ったばかりのサムライソードを抜き男の背後にまわり剣を突き付けた。

五人が集まると霧がみるみる晴れて行った。他には敵はいないようだ。

「何者だ」

スカーが問う。もちろんヒューベリックの通訳付きで。

「お前たちに言う必要無い早く殺せ」

「この者は忍だと思えます。シンやジャンパーにいる闇の住人ですよ。」

ヒューベリックが解説を付けた。

「その忍殿が、異人の俺たちに用があるなんてなんだろうな」

ニックは忍のマスクを取った。マスクの下は、まだティナと変わらない程の少年であった。しかしその目は人を突き刺すような鋭い目、それでいて冷たい目だった。冒険を楽しみながら毎日希望を持っているティナの目とは正反対である。

ティナはその少年のネックレスに気が付いた。黄金に『水』のマークを型どったネックレスである。驚いたティナがそのネックレスを触った瞬間、少年が何かを地面に叩き付けた。煙幕弾である、一気に煙が立ち込めて、辺りが見えなくなった。

煙が消えたころには、少年は姿を隠していた。

「何者だったんだ？これはちょっとやそつではお宝は手に入らないな」

ニックが言う。その隣でハリスが鯉を見ながら何かアイデアを浮かべていた。

その日の夕飯に『鯉のタタキ』という料理が出てきた。パリスが煙幕弾を見て考え付いた。煙幕弾の煙を見て、炭火で焼いた『鯉のタタキ』のアイデアを思いついたのだ。とにかく劉じゅうに仕込まれているだけあって凄い料理人である。

海賊船『ルシフェル』に乗り込み、ブラッドに情報と忍につけられ

ていた経緯を話した。

「おもしろいな。ジャンパー！」

ブラッドは笑っていた。しかしお土産が無い事に怒っていた。

「それでは伊予の町の名物でも食べに行くか」

「出発だ！」

ブラッドは号令をかけた。しかしそんな理由でいいのか？疑いたくなる号令であった。

夕飯の『鰹のタタキ』を食べた後、ティナはマストに登り、森であつた少年の事を思い出していた。

夕日が海を赤く照らして輝いている、左手の黄金のブレスレットを眺めた。生まれた時から離れることのない黄金のブレスレット。そこには『火』の紋章にティナと書かれている。

そして今日出会った少年には黄金のネックレスに『水』の紋章があつた。あの煙幕弾が炸裂する瞬間、ティナはネックレスを触り『裏側』を見ていた。そこには名前が書かれていた。

「テル」ティナは呟き、沈みゆく夕陽を見つめていた。

彼とは必ずもう一度出会う、そんな運命を感じながら…。

次回「神の住む町伊予」をお楽しみに。

キャスト

ティナ…赤髪に黒い目を持つ少年、この物語の主人公

ブラッド…「赤毛のブラッド」として海軍・海賊に恐れられている。

海賊船「ルシフェル」の船長

スカー…二等航海士、バージの弟子。槍術の達人

ニック…副砲撃長、狙撃手。スチワートと同じで新兵器開発が趣味

ヒューベリック…ドクター助手。白魔法・薬学の権威。マシューが
研究ばかりしているので彼が働く
パリス…副料理長。武術家。劉^{りゅう}を崇拜している。

第4話「神の住む町 伊予」(前書き)

「大鷲」から「伊予」に向う途中、港町「鳥井」で「テル」と出会
うティナだったが・・・

第4話「神の住む町 伊予」

四大使の秘宝

第四話「神の住む町 伊予」

港には沢山の人でごった返していた、活気がある。観光客や商売人などである。港のあちらこちらで客引きがたえない。

ここは『伊予』に近い『鳥井』という港である。沢山の観光客はここまで『船』で移動して、歩いて『伊予』に向かうそうだ。ここから北へ二十キロほどである。

海賊船『ルシフェル』は海賊旗を下ろし、帆を納め、なるべく目立たないように入港した。しかし異人が乗る千トントクラスの巨大船である。それは目立つ。入港してから、役人が来て大変な騒ぎとなっていた。通訳のヒューベリックが上手く役人と話をして帰したが、かなりの金を賄賂として使ったようだ。心配してヒューベリックがブラッドに相談に行ったところ。

「ティアナから見たらはした金だ！」

ブラッドは逆に交渉したヒューベリックを褒めた。

百五十名程の異人が、突然上陸してきたのである、鳥井の『住民』や『商人』や『観光客』等は明らかにビックリしていた。しかしそこは商人である。すぐに客引きにかかった。どの国でも商人というのは恐ろしいものだ。

海賊共は持ち前の度胸とジェスチャーで町に溶け込んでいた。数十日ぶりの陸に、異文化である。誰もがはしゃいでいた。海の男の最高のご褒美の一時である。

ブラッドはティアナと五人衆を引き連れて宿を借りた。そこで作戦会議を開いた。

「三種の神器が京の都を出発する日まで約一ヶ月、各自情報収集にあたる」

ブラッドが口を開いた。

「ただ伊予の国はここから二十キロ程距離がある。この大人数で移動していたら大いに目立つ。その為、大半のメンバーは港に待機させる。残ったメンバーには、強奪・横暴などは目立つた行動は絶対禁止する。見つければ、即首を刎ねろ！わかったな！」

メンバーが緊張して頷く。

「伊予には、俺とスチワートとマシューが行く。各自三名の部下を揃えてくれ」

「ティアナとゴルディバ隊は港に残り、ルシフェルを守ってくれ」
「ステイワートとマシューとゴルディバが頷く。」

「ブラッド、もしかして伊予に行つて浮気するつもり…。」

ティアナが突っ込む。

「まさか…ティアナを信頼して船を任せているだけだよ」

「あらそう…わかつたわ…」

ブラッドが焦つて説明したが、全然納得が行っていない様子でティアナが返事する。

「バージは京の都に何人が連れて潜入してくれ。それと京に向うルート調べてくれ」

「分かつた」

「劉は京の近くに大きな町で『堺』という所がある、そこに情報を集めに行つてくれ」

「了解した」

「堺に何もなければ、京にいるバージと合流してくれ」

劉は頷く。

「各隊は、一名魔術師を連れて行ってくれ連絡用だ。それと通訳に」
皆が頷く。魔術の通信を使って連絡を取り合うのだ。携帯魔術通信機器はすぐに手に入るが、魔力のある魔術師しか使えない。しかも魔力によって距離がきまる。そこそこの魔術師を連れて行かないと直ぐ『圏外』になってしまうので、マシューの選りすぐりの部下を連れて行くことにした。

「ジャンパーは忍という影の集団がいるようだ、それとここには陰陽師という魔術師もいるようだ。各自気をつけるように。出発は三日後にする。準備を怠るな。解散」

ブラッドが告げて会議は終了した。

ティナは一人で商店街を回っていた。他の皆となると、荷物持ちにされて前も見えなくなるからだ。船を出る時、ニックに見つかりそうになり逃げて来た。ニックに見つかりとガラクタの山を持たされる。最年少とはいえガラクタを運ぶのは嫌だ。

商店街で買い物を続けていると、威勢のいい声に人が群がっている。「魚屋」の前だ。

「さあ本日上がったばかりの鮪だよ！本日は百キロもある脂の乗った本鮪を目の前で解体して皆様に販売します。早いもの勝ちだよ！」
言葉は分らないが、大きな魚を売っているのがわかる。

通り過ぎようとティナが横切った瞬間。その『鮪師』をみてティナはビックリした。先日一行を付けてきていた、忍の少年だったからだ。少年は百キロもある大きな本鮪を大きな包丁で見事に捌き、群がるお客に威勢よく売っていた。その目はあの冷たい目では無く、温かく優しい目立った。

お客が去った後、ティナは少年に駆け寄った。ティナに気づいた少年は逃げようとした。

「テル！！」

ティナは呼んだ。驚いた表情の少年は足を止めた。

小さな橋の掛った川沿いで、二人は無言のまま座っていた。というよりも言葉が喋れない。

「どうして俺の名前がわかった？」

「俺たちの言葉が分かるの？」

ティナは驚いた。まさか言葉が通じるとは思わなかったからだ。

「忍は体術・忍術などの技術を学ぶが、あらゆる状況に対応出来るように文学も学ぶ、語学もその一つだ。何力国語は多少わかる。お前達が大驚で話している事もわかった」

「そうなんだ。凄いな、年もあまり変わらなそうなのに」

「名前が分かったのはね、ペンダントの裏側に書いてあったからなんだ」

ティナの言葉に、テルはペンダントを見た。

「実は俺は捨子なんだけど、その時からこのブレスレットが手に付いていて離れないんだ。しかも成長に合わせて段々大きくなってきているんだ」

ティナはテルにブレスレットを見せた。テルの表情は明らかに驚いていた。テルはブレスレットの『火』のマークと『名前』を見てから、ゆっくりと話し出した。

「実は俺も捨子なんだ、その時からこのネックレスがある。そしてこのネックレスは段々大きくなる」

「凄いよ。俺たち何もかも一緒だ。何かの運命だよ」

ティナは目を輝かせていた。テルも心を開いたのであろう。優しい目になっていた。

「俺が拾われた家は、表向き漁師をしている。そしてその魚を販売している。全国各地の港町に俺達の支店があるのさ。しかし実は

天皇陛下直属の『忍』の組織なのだ。『海猿』と呼ばれている。その他に別組織で山を中心に活躍している忍は『山猿』というのだ。魚屋の『支店』は、まあ『支部』だね。住民に溶け込む事が一番の情報収集だからね。『大鷲』にあるのが本家で棟梁が俺の親父殿だ。拾った俺を小さい頃から育ててくれた。毎日厳しく忍びの修行をさせられた。木刀毎日殴りつけられ、剣で切りつけられた事もある。殺されるかと思っただよ」

テルは悲しい顔をした。しかしすぐに笑顔になって話し続けた。

「天皇陛下直属の忍は、全国の平和を願い、情報を集めて、天皇に害なすものや悪人を始末するのが仕事だ。国のためなら、俺も我慢して闇に生きているのだ。人を殺す事もある。辛いよね」

ティナは彼が心の中で嘆いているのがわかった。

「最近悪い噂が流れていてピリピリしている。全国を統括する將軍の謀反が噂になっていいる。前々から横暴だったのだが、將軍の座に満足していないらしい。その陰謀の焦点になっているのが、『三種の神器』なんだ。やつら『三種の神器』が移動する時に何かを狙ってくるはず。それを阻止しなくては」

熱の籠った話をした後、ティナを見た。

「忍の俺が初めてあつた君にここまで話すとは、正直言つて自分でもビックリしている。何故かな？運命を感じるってやつかな？」

二人で笑った。

「そんな時に異人が現れてね、怪しいと思つて君達を追跡したつてことさ。『三種の神器』を狙つて、伊予に現れるじゃないかつてね。そこで一番近い港の鳥井の支店に来たら、君がいたつてわけなのさ」

その時テルの目が光った。

「ははは。ただの商船だよ。補給に入ろうと思つたら、大鷲の港は小さくてね、それで鳥井にきたの。それで二十年に一度の祭りがあると聞いて、もう少しいるつもりなんだ」

ティナはごまかす。彼らの国の宝物を盗もうとしているとは言えない。

「そうかならよかった。君を殺したくない」
さらりと殺すと言われて背筋が凍るティナであった。

その時、ティナに何かが飛んできた。『飛苦無』である。それをテルが包丁で弾いた。そんな物持っていたの？ティナは”ゾッ”としたが今はそれどころではない。

すると「テル！」と叫びながら二人の忍がティナの背後に回り、短剣を突き付けた。

「テル大丈夫か？突然店をいなくなって心配したぜ。なんだこの異人は」

「ティナだ、友達になんだ。危ない物はさげてくれ」

「怖かったよ……」

ティナは腰が砕けて座り込んだ。

「ごめんね。彼らは俺を助けようとしてくれたんだ。ゆるしてやってくれ」

半べそになりながら、ティナは立ち上がった。

「ティナおれは帰るから、また会おう。いや会えるような気がする」
テルは他の忍達と共に消えて行った。ティナはまた、地面に座り込んだ。

三日間の準備を終えて、『ブラッド隊』、『バージ隊』、『劉隊』が伊予の国に出発した。ティナはバージ隊についた。伊予にまず移動して拠点を作り、それからバージ隊・劉隊がそれぞれ出発する事になっている。

伊予の国は『観光客』・『参拝者』そして祭りの準備で住民達が集まりごった返していた。二十年に一度の祭りである。これは一大イベントである。余りにも賑やかなので、ブラッドは一日自由時間

を作った。というよりも遊ぶ拠点を探すのが見え見えだったが、一行もそれに乗った。

ティナは一通り遊んで、集合場所に帰ると拠点が決まっていた。一行はそこに移動した。案の定『遊郭』の近くだった。どうゆうこと？とニツクに聞く。

「何か勘違いしていないか？遊郭に近いが関係無い。『神社』と呼ばれる神殿の近くに川がある。その川沿いの『宿』なんだ。この川は『神社』へと続いている。最高の立地だろ？」ニツクが言い訳している。

「ティアナに言っちゃおうかな？」いやそれはヤバイとニツクがあせっていた。

その晩メンバーが集まって『宴会』を開いた。その時ティナはブラッドに近づき話をした。

「ブラッド船長、本当にこの国の宝を盗むの？」

「四大天使の秘宝であるなら頂く。しかしそれじゃなかったら盗まない。この国の宝を盗んだら、この国の総力を上げて狙われそうだからな。どうしてそんな事を聞く」

ブラッドがティナに問いかけた。ティナは鳥井で会った少年「テル」の話をブラッドに話した。ブラッドは少し考えて答えた。

「將軍の反乱？ヤバイ話になりそうだな。まあ『ルシフェル』にはまだ貯えがある。四大天使の秘宝と確認出来なかったら、さっさとこの国とはおさらばするさ」

ブラッドはティナの頭を撫でた。ほつとした。テルと戦わなくて済むと思った。ブラッドは計算が出来る。割に合わなければ、手を引くことが出来る男なのだ。

「ティナお前は運命を信じるか？」

唐突な質問をして来たので、ティナは考え込んだ。

「俺はお前と出会った時、運命を感じた。お前とその少年が会った

のも運命かもしれないな」
ブラッドが優しい声で話した。ティナはブラッドの言葉に『心』を躍らせた。

一行が宴会で盛り上がっているころ、伊予から遙か東に六百キロ離れた「江良」の国の「江良城」の豪華な天守閣で一人の男が何やら手紙を読んでいた。大將軍「大川 綱吉」である。

「誰かおらぬか？」

「はっ！ここに」將軍家直属の忍大將が現れた。

「半蔵か、首尾はどうなっている」

「三種の神器の護衛に將軍家軍団長本多様が一万の兵を率いて、京に入りました」

「そうか本多か。本当に惜しい男を亡くすな」

「ですが將軍家最高の軍団で守らなければ、天皇家に怪しまれます」
「そうだな、それでは本多には華々しくちってもらおう」

「はっ！」

「賊の手筈はどうだ？」

「全国各地から堺に集まっております」

「三種の神器が、盗まれてしまったら、天皇家の権威もそがれよう」
「將軍家最強の軍団が全滅してしまうのは痛いが、天皇家の没落より安いわ。あの小僧が天皇の座から追いやられるのも時間の問題だな」

「はっ！それと何やら怪しい異人の集団が鳥井から伊予にむかったそうです」

「ふん！そんな異人の件はお主の好きにせよ」

「はっ！」

半蔵は闇に消えた。

翌朝、またもや一行は飲み過ぎで二日酔いであった。頭を抱えな

がら『バージ』部隊、『劉』部隊はそれぞれ『京の都』と『堺』に向かった。

出発前にブラッドがティナを呼び止めた。

「ティナお前が船に来て何年だ？」

「えーと、5年です」

フィリップ神父が亡くなって五年になるのだ。その恨みはティナの心の奥底にまだ確りと残っていた。その心をブラッドは気付いていた。

「ティナこれをお前にやろう」

ブラッドは十字架の形をした、一本の剣を取り出した。

「これはポルトギースで伝説のドラキュラと戦った時に手に入れた『剣』だ。」

「スゲ・・・これを俺に？本当に？ありがとう。」

「これには火の魔法が込められている。お前を助けてくれるだろう。」

感激して興奮しているティナにブラッドは話を続けた。

「ドラキュラは何百年間、人間に憎しみを持っていた。しかしその憎しみで身を滅ぼしたのだ。ティナ憎しみはいつか己を滅ぼす。だからお前はこの剣を持って自らの手で、憎しみを断ち切る戦士となるのだ。わかったな。」

「うん・・・分かったよブラッド！ありがとう。」

ティナは言ったが分かっちゃいない。興奮しているだけだ。しかしブラッドは彼の憎しみの炎を断ち切る話をしたのだった。

一行を見送るブラッドにマシューが話しかけた。

「ティナにはそんな話をしても少し早いのでは？」

「いいのだ。ティナはあの剣を受け取った、『この瞬間のこの出来事』は一生忘れないだろう。そして俺の言った言葉も一生忘れない。それだけで十分だ。いつか彼にも分かる日が来る。その日、俺の言葉を思い出してくれる。それまで待とう。」

彼らを見送りながら、ブラッドは答えた。

ティナはまだ興奮冷めやらず、ウキウキだった。

「ティナよブラッドの言葉を忘れるな、ブラッドは誰よりも悲しみを背負っている。だからいつも温かく、そして優しく人と接しているのだ。」

ブラッドとずっと旅を続けているバージが言う。

「うん！分かったバージ！」

「それじゃー行くぜ！！みんなー！！」

何故かまたティナが号令をかけて、一行は京の都に向った。

しかしこれから起こる惨劇を彼ら一行はまだ知らない。

次回「京の都」をお楽しみに

キャスト

ティナ…赤髪に黒い目を持つ少年、この物語の主人公

ブラッド…「赤毛のブラッド」として海軍・海賊に恐れられている。

ルシフェルの船長

ティアナ…海賊船ルシフェル副船長兼経理担当。森の種族「エルフ」

にしてブラッドの妻

バージ…五人衆の一人。ブラッドの幼馴染。一等航海士として舵を

任されている。最強の剣士

ゴルディバ…五人衆の一人。甲板長。巨漢ながら性格は温厚。ただ

し戦いの時は狂戦士となる

スチワート…五人衆の一人。砲撃長。最高の狙撃手。新兵器開発が

趣味

マシュー…五人衆の一人。通信長兼ドクター。白・黒魔術の最高位

の魔術師。

劉^{りゅう}…五人衆の一人。コック長。武術の達人。その正体は、シン国の皇太子。

スカー…二等航海士、バージの弟子。槍術の達人

ゴンゴ…副甲板長、ゴルディバの弟。兄と同じ巨漢で狂戦士。

ニック…副砲撃長、狙撃手。スチワートと同じで新兵器開発が趣味

ヒューベリック…ドクター助手。白魔法・薬学の権威。

パリス…副料理長。武術家。劉^{りゅう}を崇拜している。

テル…ジャンパー国 天皇直属の忍 ティナと友達になる

第5話「京都」(前書き)

いよいよ「京都」に旅立つティナ達一行。そこでの素晴らしい出会いが彼をまた成長させる。

第5話「京の都」

四大使の秘宝

第五話 「京の都」

『京の都』というのは、何か空間が違うとティナは感じていた。今までジャンパーの『大鷲』『鳥井』『伊予』と三つの町を見てきたがそれとは違う感じた。ただ異国というだけでは説明が出来ない何か安らぎと温かさとして神聖なものを感じる。京に来てから、五日になる。『三種の神器』が出発する日まで、二週間を切っていた。

堺に向った劉達と別れ、京に入ってからティナ達一行は、京都御所から程近い場所です宿を借りて情報収集に当った。

『京の都』の和風情緒と煌びやかさに目を奪われる人々も覆いが、『お寺』や『神社』などが競い合うが如く京全体に建てられている事に驚く。そのお寺や神社が均一的に配列されているかのような町の作りになっている。それでいて町の風景を害していない。それどころか寺と神社は町に溶け込み美しさを更に高めている。

他の国では考えられない事だが、二つの違う宗教が同じ土地で共存しあうなどありえない。必ずどちらかの勢力図が崩れたり、別々の土地で勢力を伸ばしたり、それが行き過ぎると宗教戦争へと発展するのだ。人を幸せにする神様の名を使って、人間同士が殺しあうなど神様への冒瀆としか思えない。崇高な神様を理由にして、ある一部の人間の『欲』が、人々を悲しみに陥れているのだ。互いの神様も嘆き悲しんでいるであろうと思う。

しかしこの国は二つの宗教が上手く共存しあっている。それだけ

でもこの国の国民の徳の高さを感じている。ヒューベリックは、『京の都』の『お寺』や『神社』には決められた法則で建てられていて、それが結界となつて都を守っていると言っていた。だから都に入つてからのこの温かさや安らぎを感じるのだと思った。『京の都』では、ヒューベリック程の魔術師でも結界によつて魔術を半減されてしまうそうだ。もの凄い『陰陽師』による都全体の魔方陣を作っているのだ。ティアは感動していた。

『京の都』に来て五日、情報収集に当っている全てのメンバーの部屋には、何故か色々な荷物が増えていった。刀に着物、何か分からない漆塗りの箱や壺まで、スチワートとニックがいなかったため、ガラクタが無いのはいいがヒューベルトが大量の書籍を揃えているので段々寝る場所が無くなつてきている。帰りは馬車でも調達しないと駄目だな。と頭を悩ます。

「スカーこの前サムライソード買ったよね」

「これはただのサムライソードじゃない。『村雨』という名品だ。

この剣先から流れる曲線を見る。桁違いの業物だ」

ティアの問いに、スカーが力説している。その隣でバージが羨ましそうに見ている。

これだけの買い物をしていて赤字にならない、ルシフェルの財力が凄いと思った。改めてティアナの経理能力が高いことに感心した。

『京の都』で十日程した時に、堺にいる劉りゅうから小型携帯通信機『dumo』に連絡が入った。結界が張られている京では、繋がりが悪い。ヒューベリックが集中して範囲を広げた。

「堺は明らかにおかしい。山賊やごろつきが全国各地から集まつてきている。何百いや何千にはいるかもしれない。町の住民に聞いても、こんなの初めてだと言っている」

「どうゆう事なのだ？」

「分からないが、酒場であつたごろつきに聞いてみたが、ある大山賊の頭が全国の山賊やごろつきを集めているらしい。何やら凄い宝を奪うそうだ」

「この時期に数千もの人を集めて、宝を奪うとなると、『三種の神器』しかないな」

「俺は幸いシン国生まれだ、ジャンパーと顔も髪も似ている。彼らの集まりに潜入してみる。他の者は堺に待機させておく、何かあれば連絡する」

「分かった。気をつけてくれ」

バージは交信をやめた。劉リウは潜入するつもりである。

「ヒューベリック、いつ劉リウから連絡がくるか分からない。携帯通信機がいつでも使えるようにしてくれ」

バージが支持した。ヒューベリックは了解したが、結界が張られている京ではアンテナが1本しか立たない。しかもたまに圏外になる。これは一仕事だと困っていた。

三種の神器の出発が一週間後になった頃、ティナはテルと出会った。また魚屋である。こんな山の中で魚屋があると思っていなかったからビックリした。

「やつぱりきていたな」

テルがティナを呼び止めた。

「こんな山の中で魚屋があるとは思わなかったよ」

「京の都で売られている魚は大鷲や鳥井の反対側の『ジャンパー海』で取れた魚を使っている。そっちの方が近いから鮮度を保てる。何しに来た？」

「いや観光だよ。ジャンパーに来たからには、都を見てみないとね
ティナが動揺して答える。

「嘘だな。お前達は何者だ？まさか天皇に害をなすものか？」

「違うよ、ただの観光だよ。でもこっちに来る途中、何やら厳つい

奴らが何十人と堺方向に向って行つたけど、何かあったのかな？」

殺氣がこもるテルに、ティナは何氣に情報を与えた。

「何？何故そんな事をいう？まあそんな情報は同じ忍の『山猿』から聞いている。山賊どもが数百や数千の賊を堺に集めている。奴らは『三種の神器』を襲うつもりだ。そんな事は絶対させない」

テルの目は決意に満ち溢れていた。

その時である、鈴の音が鳴り響き大きな行列が道の真中を行進してきた。その行列が来た途端、住民は道の端により膝を付いて頭を下げた。テルも膝を付いて頭を下げた。

ティアのみ何が何やら分からず、立ったままであった。それに気付いたテルが慌てて座らせようとしたが遅かった。

「無礼者。その異人。陛下の前で、頭を下げぬとは不届きもの。

その首この場で切り捨てる」

兵士がティアを引きずり倒し、刀を抜いた。

「お許し下さい。この者は異国の者ゆえ、状況が分かっておりません。これから言い聞かせますので、お許しを」

テルが身を挺して彼を守った。

行列の中央にある、豪華な籠の中で様子を伺っていた『天皇』が何事か？と側近に聞いた。

「何やら異人が迷い込んで騒ぎになっているようです。たった今排除いたします上、少々お待ち下さい」

「よい。その異人まだ子供ではないか、殺してはならぬ。御所で話をしたい。迷惑をかけておるのだ丁重にお連れしろ」

天皇は側近に命じた。

「しかし陛下、そのような者を陛下に近づけては御身に関わります」側近が不服そうに言ったが、天皇は「よい」といつて曲げなかった。洪々、側近は兵士の元に駆け寄り、ティアとテルを助けた。

御所に呼ばれたティナとテルは、散々調べられた後、王座の間に呼ばれて待機させられた。天皇が玉座に座った時には数十の兵士に囲まれていた。

天皇の顔は白羽しろはがたえ二重とほりの帳とばりよって見る事が出来ない。

「兵は引け、そのような状態では話も出来ぬ」

「しかし陛下」

側近が駆け寄ったが、制して兵を引かせた。

「許せよ。お二人方、名をなんともうす」

「はっ！私は、陛下直属『海猿』棟梁長衛が一子『テル』と申します。この者は『ティナ』と申して商船で海を渡り、我が国に入りその際に友達となりました」

テルがティナの代わりに答える。

「あの棟梁、長衛の息子か？これは失礼な事をしたな。おぬし達の働きによって平和が保たれている。感謝するぞ」

「有難き幸。」

「その赤髪の異人は、どこからまいられた」

それはテルも知らない。テルはティナに小声で話した。

「ポルトギースであります」

テルが代わりに答えた。すると天皇がぎこちないが異国の言葉で話し始めた。

「ポルトギースは遠いなく参られた」

「私は少々陰陽道をかじっている。それに宮廷内にいると趣味が読書で、色んな書物を読む。西方の国が献上してくる、美術品や機械時計より書物の方が面白い。異国の書物を読んでいるのだ」

ティナとテルの驚いた顔を見て、天皇は答える。

「西方の国々は言葉が違うが、よく似た言語を使っている。だから違う国の書物でも少しは読むことが出来る」

この方は凄いとティナは思った。ティナの住んでいたポルトギー

スの隣国オータンやブルツやイリアなどは言葉が似ていて、西方の国を回っても余り苦にならないのだ。

「ところで異人の少年ティナよ、これまで色々な国を回ったであろう。私にその話を聞かせてくれぬか？」

天皇は言つと、立ち上がり帳とまりを避けて二人の前に現れた。側近や兵士は慌てたが、それを制した。

「私が聖徳天皇である。よろしく頼む」

天皇は頭を下げ、二人の前に座った。二人はビックリして言葉が出なかった。テルにしてみれば、大変なことである。頭を畳につけて上げられない。天皇は神の子孫とされている。テルから見たら神が下りてきたようなものだ。しかしティナは天皇を見て、若いと思つた。二十代前半だろうと思う青年である。

「テル頭を上げよ。私は神ではないのだから」

天皇は優しくつけた。テルは涙を流しながら頭を上げた。天皇は笑顔を見せて話し出した。

「ティナよ、私は世界がどのようなところか、この国がどのような位置にいるのかが知りたい。この狭い京で座して全国・世界を見るのでは無く、世界から見た目線で、この国を見ていきたいと思つておる。そして広い視野で国を治めたいのだ。聞かせてくれぬか？」

ティナは改めて天皇の凄さを知った。そして喜んで今までの冒険話、色々な国の事、住民の事、文化、伝統、楽しいことや、時には辛いこと、戦争の事などをはなした。天皇は時には笑い、時には涙を流して話を聞いた。テルも一緒に話を聞いた。

話は続き、夜も更けていった。

「もう遅くなつてしまった。ティナありがとう。私の中で貴重な体験となった。礼をいうぞ。褒美を遣わすゆえ、今日は帰りなさい」

「褒美は入りません。私が陛下と話したこの『瞬間』が何よりの宝です。ありがとうございます」

ティナが答えた。話が終わり帰ろうとする頃、天皇が戻ってきた。
「待ちなさい。やはり私の気持ちとして褒美を遣わしたい」

天皇は一本の短剣をだした。

「これは天皇家により代々使われた。宝剣である。陰陽道で『水』の呪術をかけている。テルよ、代々我が天皇家を支えてくれたお主に渡そう。『水』は全ての生命の源。そして水は変化して全ての物を断ち切る強い力がある。お主ならきつとこの宝剣の意味を分かってくれると思う。大事に使ってくれ」

「陛下！」

側近が諦めムードで止める。テルも拒んだが、天皇の意志の強さを知って受け取った。深々と頭を下げて受け取った。

「有難き幸せ。テルは死んでも陛下をお守り続けます」

天皇は笑いながらありがとうと答えた。

「陛下、將軍家に不穏な影があります。堺にも賊を集まり何やら企てております。『三種の神器』を狙う算段でしょう。お気を付けてください」

テルが深刻な顔をして天皇に告げた。

「知っておる」

「なら將軍家を処罰して下さい」

「將軍家は潰さぬ。いつの時代でも悪しき野望を持つものが現れる。それは天皇家も同じなのだ。どちらかが道を誤った時に、どちらかが制せなければならぬ。天皇家一極であれば独裁になりかねない。だから將軍家はいてもらわなければ困るのだよ」

天皇は優しく答えた。ティナ驚いた。どこ人間も権力を持つと自分の立場を守る事だけを考える。しかし天皇は次の世代、いや未来の国を思って組織しているのだ。天皇から見たら、將軍家などはシナリオの一部なのだ。

「それに三種の神器は簡単には手に入らぬ。それが神器たるゆえんだよ」

天皇は笑いながら答えた。それが何を意味しているのかは？この

時は分からなかった。

帰り道、ティナとテルはまだ興奮が冷め遣らなかった。特にテルは天皇に宝剣を頂き、手が震えていた。テルにとつては神に等しい天皇と会って話をして、しかも宝剣まで頂いた。こんな夢のような事が現実には起こると思っても見なかったからだ。

「凄い方だったね。この国は凄いよ。こんな凄い王がいる『国』だから、隣の強国『シン』が攻めてこれないのかもしれない」

ティナに取ってもブラッド以来の感動である。

「陛下は太陽神の子孫なのだ、まさに私たち国民を太陽のように見守って下さっている」

「陛下にお目通りがかなったのもティナのお陰だよ。ありがとう」
テルは目を輝かせてお礼を言った。

そんな夜、『堺』の町の寺院で、一つの集会が始まっていた。賊の集会である。

「皆のもの、よく集まってくれた。全国各地から集まった者は約二千人を越えた」

堺に拠点を置く、賊の大棟梁「黒虎」である。後ろに副棟梁「赤虎」「青虎」が控えていた。

「我ら賊は、普段合間みえない。いや互いに争ってきた。しかし今度は違う。あの贅沢三昧している天皇家から国の宝『三種の神器』を奪い取る。俺たちが虐げられてきた恨みを思い出せ。將軍家の軍団など平和ボケした烏合の衆だ。やつらを皆殺しにして、天下を俺たちの騒乱の世にしようぞ！」

場内から歓声が登る、黒虎は自分の演説とその歓声に酔っていた。その時だ、「何者！」と言って黒虎の後ろに控えていた赤虎が手に持っていた鉾を寺院の屋根に投げつけた。その後、屋根の上から

人が倒れて落ちてきた。その胸には赤虎が投げ付けた鉾が刺さっていた。

「これは『山猿』です。棟梁！」青虎がいう。

「ふん！『山猿』か！天皇の犬め！」黒虎は山猿に近付き、自分の大刀を抜いて一刀両断した。山猿は真つ二つになり息絶えた。

「天皇など怖くもない。これからは俺たちの世だ。皆のもの剣を取れ」

黒虎の叫びと共に場内は高ぶり、剣を振りかざし歓声をあげた。

賊の中に紛れこんだ、劉りゅうは一部始終を見ていた。

「これはヤバイ事になるな。ブラッドに報告しなければ」

劉りゅうは呟いて寺院を後にした。

夜も吹け、興奮冷めやらなかったティナとテルは気持ちよさそうに眠りにについている。

將軍・ブラッド・黒虎そして天皇の互いの思惑が駆け巡りつつ夜が更けていった。

その思惑が激突するのは、目前へと迫ってきていた。

次回「三種の神器」をお楽しみに

キャスト

ティナ…赤髪に黒い目を持つ少年、この物語の主人公

ブラッド…「赤毛のブラッド」として海軍・海賊に恐れられている。

「ルシフェル」の船長

バージ…五人衆の一人。ブラッドの幼馴染。一等航海士として舵を任されている。最強の剣士

劉りゅう…五人衆の一人。コック長。武術の達人。その正体は、シン国の皇太子。

ヒューベリック…ドクター助手。白魔法・薬学の権威
テル…ジャンパー国 天皇直属の忍 ティナと友達になる。
聖徳天皇…ジャンパー国の天皇。後の代に人は「太陽天皇」と呼ぶ。

第6話「三種の神器」(前書き)

ついにそれぞれの思惑を持った者達の激突が始まる！！ティナとデルの運命は！？

第6話「三種の神器」

四大天使の秘宝

第六話「三種の神器」

『京の都』の天皇が住む御所の近くの宿で、海賊船『ルシフェル』一等航海士『バージ』を中心としたメンバーが会議を行っていた。三種の神器が都を出発するまで、後三日と迫った夜の事である。メンバーは殆どが情報収集+買い物を終え、会議も大詰めであった。

「堺に潜入している劉りゅうによれば、山賊どもの群れは2千人にも及ぶらしい。その集団は既に堺を出発して、伊予に向うルートに移動している。伊予で襲うのでは無く、途中の山奥で勝負をかけるようだ」
「バーシりゅうは劉に与えられた情報を伝える。」

「奴らは護衛の1万軍勢が不利な、険しく細道の場所を選び側面から一気に攻めるはずだ」

「スカーが付け加える。」

「一番適していると思われるのが、来る途中で通った。『野上』の山奥にある大きな橋の近くの山道が一番険しく、側面の山から襲いやすい。そこがポイントとなってくるだろう。行列が渡り始めてから橋を爆破し、隊を分断する。そして残りの部隊を、地理的に有利な山賊が側面から護衛部隊を襲う。これが奴らの計画だと思われる」
「バーシは百戦錬磨の武将でもある。一度通ったルートから、敵が考えられる作戦を読んだのだ。戦略家としての能力も高い。」

「二千人の山賊どもが、一万人以上もいる將軍家最強の軍団に勝つには、この場所しかあるまい」

「この件はブラッドにも伝えている。作戦はこのように行う。三種

の神器の行列の後を追って、我々バージ隊が付いて行く。劉^{リウ}は山賊の中に混じり動向を探る。劉部隊は山賊の後ろについて貰う。ブラッドはマシユー隊・スチワート隊それにゴルディバ隊を引き連れて伊予から出発、行列の正面を押さえる」

バージは隊の編成を告げた。

「しかし数が一万と二千の戦いである。まともに遣り合うわけには行かない。山賊が將軍家を襲い、混乱している時に、三種の神器を狙う。分かったな」

バージの説明にメンバーは頷く。一万二千人の戦いの中に、たった数十人で乗り込んで行くのである。それなりの覚悟が必要である。ティナはテルと戦うことになるのか？が心配であった。

「狙いは三種の神器の一つ『天叢雲劍』（あまのむらくものつるぎ）である。四大天使の秘宝の一つミカエルの秘宝は『炎の劍』だと聞いている。可能性があるとすればこいつだ。その他、八咫鏡^{やたのかがみ}、は神を映し出しその神を光臨させるそうだ。八咫瓊勾玉^{やさかにのまがたま}は神がかり的な靈力があり、絶大なパワーを引きだすそうだ。」

バージ達が収集した情報を話す。伊達に都を徘徊していない。（
「買った物や遊び中心ではあるが…」）

「ブラッドはこの国の宝を狙う事に慎重だ。下手をすると一国と争う事になるからな。確認を怠るな」バージがメンバーに言い聞かせた。

「それから仕入れた荷物はいち早く、明日馬車で鳥井に帰ってもらう。ジョンにはすまないが馬車を手配して鳥井に戻っていてくれ」

メンバーの一人、航海士ジョンにバージはお願いをして、ジョンも了解した。やっぱり買った品物は大事らしい。

「それでは会議は、終わりとする。今から酒屋に行くから付き合え」やっぱり今日も飲むの？とティナは呆れる。上陸してから飲み続けである。彼らのワールドさは流石に凄いとティナは思った。

『野上』の山奥の森の間に広い平地がある。そこに陣を構え、山賊棟梁『黒虎』は副棟梁『赤虎』『青虎』それと一部の幹部と共に軍議を開いていた。

「三種の神器は三日後に、將軍家軍団長本多が兵一万を護衛に付け京を立ちます。この『野山』到着するのは京から一週間後かと思われず」

赤虎が説明した。

「1万の兵など山の中では赤子同然。山間で全滅してくれるわ。橋の爆破の準備は出来ているな？」

黒虎の問いに青虎が「はっ！」と答えた。

「それから半蔵殿より書状が届いております」

青虎が書状を黒虎に手渡す。

書状を受け取り、黒虎は読み出した。読み終えた黒虎は話し出した。

「天皇直属の『山猿』と『海猿』が嗅ぎまわっているようだ。半蔵殿直属の伊田忍軍が殲滅に当たっている。余計なことをする。」

『山猿』『海猿』如き恐れるにたりぬは。」

「しかし後ろを守って頂けるのは有難い」

「分かつておる。精々働いて貰おう。軍議はこれにて終わる」

黒虎は書状を近くの松明に焼き捨てて宿舎に戻った。

彼らが出て行った後、森の影から軍議の一部始終を聞いていた劉りゅうが駆け寄り、燃える途中の書状を松明から取り出した。書状を確認して闇へと消えていった。

遠い東の居城、『江良城』天守閣で大將軍 大川 綱吉は、將軍家直属の忍『伊田忍軍』棟梁半蔵と密談をしていた。

「半蔵、手配は整ったのか？」

「はっ！山賊の棟梁黒虎は、部隊を『野山』に配置しました。一週間後には決行出来るかと」

「バカな山賊共には大金をチラつかせて働かせろ。『三種の神器』は伊田忍軍が回収しろ。国の宝だ、一つ拝みたいものだな」

「はっ！天皇直属の『山猿』『海猿』が嗅ぎまわっております。もうこちらの動きに気付いておられると思われます。こちらの方は我が伊田忍軍が処理致します」

「天皇家などは、もう潰れる。関係無いわ。『山猿』『海猿』は全滅させろ」

将軍が答える。その目には野心の炎が灯っていた。

三日後、将軍家最強軍団本多部隊が一万の兵を引き連れて京の都を出発した。その後を追って、バージ部隊が出発した。それと同じ日にブラッド率いるマシュー隊、スチワート隊、ゴルディバ隊が伊予を出発した。劉隊は黒虎率いる山賊隊の後を等間隔に付いて行った。

京を出発して本多軍は四日、隊列を組み『野上』に入っていた。細い山道である。一万の隊列は、長く連なっていた。本多将軍は苛立っていた。『三種の神器』を守るために、一万もの兵を引き連れたが、この長者の列では、支持をするにも時間が掛かりすぎてしまう。ここを側面から襲われてはひとたまりも無いと心配していた。森の中警備や下見は、将軍家直属の伊田忍軍が担当しているがその気配が感じられない。これはどういう事なのか？将軍は胸騒ぎを感じていた。しかしその心配は現実のものとなった。

長い隊列が『野上大橋』と呼ばれる橋に差し掛かった。山賊の副棟梁赤虎は、爆薬を仕掛け待機していた。その隊列が半分に達しよ

うとする時に、三種の神器を乗せた神輿が見えた。

「火を放て」

号令と共に山賊が仕掛けた爆薬に次々と火の付いた弓矢を打ち込んだ。

「ドカーン」

轟音と共に、橋を渡っている人間諸共に橋は崖に崩れ落ちていった。

一瞬の出来事である、本多の前で橋が崩れ落ち、隊が分裂してしまった。

「何事か？」と叫ぶ本多であったが、隊列が長く錯乱している兵士達から情報が一切入ってこなかった。その時である、隊列の右側の森の間から雪崩の如く山賊達が襲い掛かってきた。

山賊達の奇襲である。側面を突かれしかも細道、片側は崖である。兵士たちは錯乱しており、しかも兵の半数が崩れた橋の向こうである。地の利は完全に不利である。しかも側面からの奇襲である。兵士たちは統制が取れず隊列は崩れ果てた。

「遅かったか！」

駆けつけたバージ隊は目の前の惨劇を見て驚愕である。一万もの兵が分断されている。しかも山賊どもに兵士達は切り倒されて行く五倍もの兵を相手に地の利を生かして攻略したのである。まあそれを読んでいたバージも凄いとしか言えない。

隊列の先で、善戦している箇所があった。本多である。三種の神器の神輿の周りを、近くの兵士をまとめて守りながら戦っている。流石である。しかし細い道では残りの兵士も助けに入らず、しかも山賊の奇襲で錯乱している。

バージ隊は森の中を走り抜け、『三種の神器』の近くまで寄って行った。

山賊の副棟梁『赤虎』・『青虎』が本多の隊を切り崩していた。全

滅も時間の問題であろう。対岸から半分の隊が弓矢で応戦するが届かない。絶体絶命である。

その時である。十名ほどの『影』が森を飛びぬけ神輿の前に立ちはだかった。そして山賊達と戦いだした。『山猿』『海猿』である。それにしても数が少ない。そしてよく見るとテルは肩からと額から血を流している。彼らは伊田忍軍の奇襲にあい、殆どの仲間を失いながら、『三種の神器』を守りに来たのだ。

テルはサムライソードを持ち、天皇から頂いた短剣を腰に挿して山賊副棟梁青虎と戦っていた。だが相手の方が強い、手負いのテルは神輿に追い詰められていた。

「テル！」

ティナは大声を上げて混乱する戦場に飛び込んで行った。

「ティナ！チツ！作戦もあったものじゃない。バージ隊あの神輿を守るぞ」

バージは指示をしてティナを追いかけた。

テルは防戦一方であった。勝負にならない。実力が違いすぎる。

追い詰められていた。青虎の大刀がテルの頭上に振り下ろされる瞬間、ティナはブラッドに貰ったクロスソードを抜いて受け止めた。

「ティナ！」

テルが驚く。

「何故来た？」

テルの言葉にティナは「友達だからさ」と答えた。

しかしその側面に赤虎が槍を突きつけた。黒虎の剣を受けているティナは避けられない。その瞬間。スカーがランス（槍）を構えて受け止めた。

「世話が焼けるな」ティナ。こいつの相手は俺がするお前はそいつをやれ。」

スカーはティナに支持をして赤虎に一撃を加えた。

突然天皇直属の『海猿』『山猿』が援軍に駆けつけ、しかも知らない異人までも加勢に來たので、山賊と戦っている本多は驚いたが、味方だと分かり戦いを続けた。

赤虎とスカーの槍の戦いは一進一退であつた。腕は互角。息の詰まる勝負である。

しかし二人の勝負に水を刺した男がいた。『黒虎』である。大刀がスカーを狙って切りつけた。スカーは間一髪でかわした。

「何をしておる。早く片付けぬか！」

黒虎は赤虎に怒鳴りつけた。陣の後方で指示をしていた。黒虎は『三種の神器』の確保が中々出来ない前線に苛立って自分で乗り込んできたのだ。

2対1これは不利だな？と思つたスカーであつたが、バージが駆けつけて來たのを見て安心した。

バージは黒虎に切りかかった。

「どうやらこいつが大将みたいだ」

「ならこいつをさつさと殺つて終わらせる」

バージは刀を構えた。邪魔をされた黒虎は、バージに切りかかった。

ティナとテルは青虎と対峙して、奮闘していた。

「小僧面白い剣を持っている。何やら剣に術を掛けているようだ。お主を殺して頂くぞ」

青虎はティナに容赦なく切りつける。ティナの剣には『火』の魔法が掛けられている。剣全体に炎が上っているのだ。

何度か切りあっているうちに、テルのサムライソードが切り落とされ、テルは青虎に地面に叩きつけられた。テルは伊田忍軍と切りあい、山賊との戦いでボロボロだった。

「危ない！」

ティナが叫んだが、動けないテルに青虎が切りつけた。間に合わ

ない。

その瞬間、テルは叫びながら、腰の短刀を抜いて青虎の攻撃を防ぐとした。しかしその宝剣の先から眩い光が走り、物凄い勢いで刀身から水が飛び出した。水は刃物のような形になって、青虎に襲い掛かった。

青虎は大刀で防いだ、その大刀を水の刃が突き破り青虎の胸を切り裂いた。

青虎は叫びながら倒れた。一瞬の出来事でテルとティナが顔を見合わせる。すると天皇の言葉を思い出した。『水の魔法』お互い目で合図した。

ティナとテルが喜びに浸っているその背後で、突然青虎が立ち上がり血を吐きながら神輿に切りかかた。青虎の大刀が神輿の屋根が壊し、三種の神器の収められている黄金の棺が露になった。

「まずい！」

ティナとテルは炎の剣と水の剣を振り上げ、青虎に切りつけた。

叫び声を上げた青虎であったが、そのまま黄金の棺を挟み開けた。

その時、両サイドに離れているお札のようなものが、破れるのをティアは見た。

「グオ〜！」

何かが爆発したような音と共に、眩い光が一本の柱となって黄金の棺から天に向かって登っていった。青虎の身体は吹き飛ばされ地に叩きつけられ動かなくなった。

さっきまで晴れていた上空が突然厚い雲に覆われて雷が次々と落ちた。その中心が黄金の棺から伸びる光の柱である。

何が起こったのか？この怪奇現象に山賊も兵士も固まり動きが取れない。

光の柱の頂上に五芒星の魔方陣が画かれた。

ペンタグラム

「陰陽師の呪印。ペンタグラムの魔方阵だ。」遅れて駆けつけたヒューベリックが叫んだ。

その直後、光の柱の先の五芒星の中から『魔獣』が降り立った。怖ろしい魔獣には蛇のような八つの顔があり、胴体には全てを切り裂くような爪を持った手と足。背中には全てを覆い隠すような真赤な翼が生えていた。

突然の魔獣が現れた為、山賊、兵士共に我先にと逃げ出し大混乱になっていた。

怖ろしい魔獣は、八つの口から炎を吐き出し逃げ惑う山賊・兵士を焼き尽くし地上に降り立った。

次回『八岐大蛇』をお楽しみに

キャスト

ティナ…赤髪に黒い目を持つ少年、この物語の主人公

ブラッド…「赤毛のブラッド」として海軍・海賊に恐れられている。ルシフェル船長

バージ…五人衆の一人。ブラッドの幼馴染。一等航海士として舵を任されている。最強の剣士

劉^{りゅう}…五人衆の一人。コック長。武術の達人。その正体は、シン国の皇太子。

ヒューベリック…ドクター助手。白魔法・薬学の権威。

テル…ジャンパー国 天皇直属の忍 ティナと友達になる。

スカー…二等航海士、バージの弟子。槍術の達人

黒虎…山賊の棟梁、全国の山賊を集め、三種の神器を奪う計画を立てる。

第7話「八岐大蛇」(前書き)

奮闘するティナやテル達の前に突如現れた、伝説の魔獣「八岐大蛇」！
怖ろしい魔獣は八つの口から炎を吐き、混乱する戦場を火の海と化した・・・

第7話「八岐大蛇」

四天使の秘宝

第七話「八岐大蛇」

辺りは騒然としていた。逃げ惑う、山賊や兵士達。突然天空から舞い降りた魔獣は、十六の眼で私達を睨みつけた。その眼に睨まれた人間は、恐怖のために固まり身動きが取れなくなった。

魔獣は三種の神器を守るように神輿の前に立った。

「ヒドラ（火トカゲ）」

ティナは叫んだ。ヒドラは伝説上の魔獣で、火の精でもある。

「違います。ヒドラは頭が一つから三つですが、これは八つもあります。これは陰陽師が召喚した別次元の魔獣です」

ヒューベリックが説明する。

「八岐大蛇」

テルは地面に腰を落とし、驚愕の表情で言葉を絞り出した。

「なんだって？」

「この国の神話に出てくる怪物だ。この怪物を切れるのは、神が使わした三種の神器の一つ『天叢雲剣あまのむすぶこし』しかない」

テルが叫ぶ。何故突然魔獣が現れたのか？ティナとテル頭に過ぎるものがあつた。

「天皇陛下だ！」

ティナとテルがお互い声を出した。

「陛下は、三種の神器は簡単に手に入らないと言っていた」

二十年に一度、三種の神器は天皇に献上されるが、神社に戻す時に『封印』をかける。天皇は陰陽道を少しかじっていると聞いたが、少しどころではない。大陰陽師だったのである。

黒虎と赤虎は突然の魔獣の出現で怯んだ。撤退！と叫び退却をしようとした時に、バージとスカーが彼らを塞いだ。

「決着はまだだ、何処に逃げる？」

バージが睨みつける。

「お前達は馬鹿か？こんな化け物が出ているのに戦えるか！」

言葉は分らないが化け物の出現により、逃げだすのが分かる。

「魔獣が怖いのか？俺たちは世界中を旅して幾多の修羅場を潜っている。こんな魔獣は珍しくもない。世界知らないお山の大将さん、さあ続きを始めよう」

八岐大蛇は人々を焼き尽くし、手が付けられない。ティナとテルは炎からヒューベリックの防御魔法『ウインディシールド（風の盾）』によって守られていたがもう長く持たない。

「ティナその子連れて逃げる！もう持たない」

「嫌だ！ヒューベリックを置いては行けない」

その時である、数十の光の矢が八岐大蛇を襲い掛かり、胴体に突き刺さった。第二波には、数発の大砲が撃ち込まれ、八岐大蛇は痛みで咆哮した。ティナとヒューベリックは後ろの森を見渡した。

「ブラッド。みんな！」

ブラッド隊は、橋が壊れているため、迂回を余儀なくされていた。到着したと思えば魔獣の出現である。予定には無かったが、隊を編成して応戦した。マシユー部隊に第一陣として魔法攻撃、第二陣としてスチワート隊の小型大砲で応戦したのだ。

そしてゴルディバ甲板長、弟のゴンゴが率いる屈強の10名の甲板員がアックス（斧）を構え、咆哮と共に雪崩の如く戦場へと駆け下りた。

逃げ惑う山賊達は、狂戦士とかしたゴルディバ部隊に次々と切り倒されていった。

赤虎はスカーと腕は互角だった。しかし八岐大蛇の出現により、

赤虎は集中力が散漫になっていた。スカーもそれに気が付いていた。世界で数々の冒険をしていたスカーにとって、この状況は珍しいものではない。（ある意味珍しいが……）スカーは動揺などしていないのだ。

赤虎の攻撃に鋭さが無くなった。修羅場の経験の差である。

そして最後は呆気無く終わった。赤虎の槍の突きの一撃を『数ミリ』で見切りかわした。その直後、スカーは槍を左手だけで持ち、赤虎の胸に槍を突き付けた。その槍の先は赤虎の心臓を見事に突き抜いた。赤虎は血を吐きながら仰向けに倒れた。そしてそのまま動かなくなった。

バージと黒虎の戦いは壮絶を極めた。黒虎の剛腕が大刀振り回し、バージの剣が受け流す。パワーの黒虎とスピードのバージである。赤虎は動揺していたが、黒虎に乱れはない。戦いに集中しているのだ。根っからの戦士であろう。笑みすら浮かべている。

「楽しいぞ。計画通りに行かなかったが、こんな闘いが出来るとは思わなかったぞ」

黒虎の回りには闘気で満ち溢れていた。

「いい戦士だ。だが魔獣に巻き込まれる分にはいけない。そろそろ終りにしよう」

バージが呟く。その時である、森の向こうからゴルティバ率いる狂戦士隊が山賊の群れを突き破ってきた。

「何事だ！」

黒虎の気が一瞬乱れた。

バージは勝機を見た。バージの突きが流星の如く突き出した。彼の異名『流星のバージ』はこの突きから来ているのだ。どれだけの突きが出ているのか分からない。この突きを受けて、生きている人間はいないのだから。

右腕と、左腕が次々と切り裂かれた。体中には突きの跡が数十と残った。バージが突き終わった瞬間、黒虎の体中の傷口から血が噴き出した。黒虎はよろけながら後ろを振り返った。そこには山賊に

潜入していた劉リウが立っていた。

「助けてくれ…」

黒虎が血を噴き出しながら吐き出すように叫んだ。

劉は、黒虎に近づき『ミゾオチ』に一撃した。すると黒虎の『目』『耳』『鼻』『口』すべての穴から血を噴き出し倒れた。『発劉』と呼ばれる武術の奥義である。わずか数センチの距離から、拳を打ち出すだけで、人間の人体を破壊する、恐ろしい奥義である。

棟梁・副棟梁が殺され、山賊達は蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。元々八岐大蛇が現れてから逃げ出していたが、『頭』がいなくなる余計に無残である。烏合の衆というのはこんな感じなのだろう。

残るは『八岐大蛇』のみである。辺りは死体の山と炎に包まれていた。八岐大蛇はマシューの魔法とスチワートが応戦していたが、厚い皮膚を貫くことが出来なかった。八岐大蛇も狙いをマシュー達に定めて、八つの口から炎を吐きだした。高温度の八岐大蛇の『炎』を高レベルの魔法の盾で身を守る事は出来たが、森が焼け野原となり周りの炎と煙で、持ちこたえられるのもあと数分程度であった。燃え盛る森を背にブラッドが八岐大蛇に向かって歩き出した。金髪の髪は炎によって赤く映し出されていた。

その光景を見てティナは「赤毛のブラッド」と呟いた。

ブラッドは八岐大蛇の前に立ち、話しかけた。

「よう！もう山賊は逃げ帰った。三種の神器も守った。もう帰ったかどうか」

通じる訳ないが、ブラッドは八岐大蛇を睨み付けた。

八岐大蛇は『咆哮』を上げ、翼を広げたかと思うと上空に羽ばたき、空からブラッドに目掛けて炎を吐いた。上空に逃げたのは、ブラッ

ドの気がただものでは証拠であろう。

ブラッドの周りが灼熱地獄とかした。

しかしブラッドは炎が吐かれた瞬間、目にも止まらぬ速さで、移動して黄金の棺の前に立っていた。

黄金の棺には攻撃出来ない判断した、ブラッドが俊足で移動したのだ。

怒り狂う八岐大蛇をしり目に、ブラッドは黄金の棺から『天叢雲剣』あまのむすくものつるぎを取り出し、片手で天に高々と掲げた。

天叢雲剣の鞘には黄金の装飾のがされた、それにさまざまの宝石が装飾され神々しさが漂っている。そしてその場にいた誰もが感じる霊気が漂っていた。いや鞘からでは無い。鞘は霊気を抑えているのだ。ティナ達を感じていたのは、鞘から漏れる刀身の霊気である。

怒り狂う八岐大蛇がブラッドに上空から襲いかかった。

ブラッドは高々と上げた 天叢雲剣の柄をもう片方の手で抜き出した。するとその刀身から眩いばかりの光が辺り一帯を覆い尽くした。まさに太陽の如くである。この光に八岐大蛇も怯んだ。

ブラッドは刀身を鞘から抜くと、鬼神の様な素早さで八岐大蛇に切り付けた。それは正に光の疾風である。無数の光の”刃”は八岐大蛇を切り裂いた。

誰もが眩い光で、まともに見えない。現状が把握出来ないのだ。

ブラッドが天叢雲剣を鞘に納めると徐々に前が見えるようになってた。そしてその場にいる誰もが驚愕した。あの八岐大蛇がブラッドの背後に立ち、今にも襲いかかるうとしていた。

「ブラッド！危ない！」

ティナが叫んだ。その瞬間、八岐大蛇の体から無数の血が吹き出し、大きな地響きと共に倒れたのだ。ブラッドの圧勝である。周りの本多をはじめ、数千の兵士も声が出ない。

ブラッドにティナが駆け寄り、その後他メンバーも駆け寄った。

その直後、厚い雲に覆われていた上空に五芒星が浮かび上がった。その五芒星から光の柱が八岐大蛇に降りて、そのまま五芒星の中に引き上げて行った。その後五芒星が消えて行き、厚い雲は晴れて行った。

「終わったの？」

「ああ終わった。こいつも四大天使の秘宝では無かった」
ティナにブラッドは微笑みながら答えた。

「しかしこの宝は凄いな。流石『神器』と呼ばれるだけある……。
だが……俺たちには大き過ぎる代物だ。」

ブラッドは天叢雲剣を黄金の棺に戻した。

ここがブラッドの凄いところだ。ティナは思った。普通の人間ならこれだけのお宝を目にしたら、欲に駆られて持ち出すであろう。それを返すのだ。大きな男だ。ティナはブラッドを眺めた。

ブラッドは軍団長の本多を呼び出し、もう敵は来ないだろうと言って、三種の神器を伊予に運び出すように指示をした。勿論マシューの通訳付きで。本多も恩人であるブラッドに深々と頭を下げて隊に指示した。

「さて野郎ども我が家ルシフェルに帰るぞ！」

ブラッドの号令と共に『赤毛のブラッド海賊団』は掛け声をかけてその場を去っていた。ティナはテルがいなくなっている事に気づいた。

しかし彼にはまた会えるだろうと思い、ブラッドの後を追った。

惨事の現場から遠く離れた、『京の都』の御所の玉座で聖徳天皇は座っていた。聖徳天皇は、目を瞑り瞑想に浸っていた。目を開くと、彼の額から血が流れ出した。

「まさか八岐大蛇を倒せる人間がこの世にいるとは思わなかったよ。」

聖徳天皇は血を拭った。

大陰陽師である聖徳天皇は黄金の棺に呪術をかけ封印した。天皇家は代々陰陽師の家系なのである。これが神の子孫とも呼べる天皇家の力なのだろう。都に結界の為、神社やお寺を建てたのも大陰陽師である歴代天皇の指示であろう。

しかし『術』が破られると、かけた本人に『呪』が返ってくる。陰陽とは恐ろしい『呪』なのである。

「面白いな。あの異人は」

聖徳天皇は笑っていた。

部隊を収集するために軍団長本多は、橋を渡った約五千人の兵士を近くの平地に配置させて仮の橋を造らせた。生き残った反対側の兵士は三千人程になっており二千人程の部下が、山賊や八岐大蛇によって亡くなっていた。

残りの三千人の兵士を、近くの平地に陣を引いて休ませた。その一方で、死体を埋葬、橋の修復に当たった。將軍家・天皇家にも報告の馬を走らせた。

仮の橋の修復には一週間を要した。本多軍は大幅に遅れたが、それから一週間後に伊予に無事到着した。そして『三種の神器』を伊予神社に奉納する事が出来た。

『鳥井』に到着した一行は、ルシフェルに戻り疲れと傷を癒した。この惨劇で一人も死人を出していない、ブラッドの組織力・統率力は凄いとティナは思った。

数日疲れを癒した後、ブラッドが会議を開いた。

「劉^{りゅう}の調べで、今回の件の黒幕が東の『江良』という国の大將軍だ
という事が分かった」

「今回は散々な目にあつた。しかもお宝無しだ。こうなったら將軍
の城に一発食らわして帰る事にする」ブラッドの発言にビツクリし
たが、彼の奇想天外な行動はいつもの事である。そのうち皆で高笑
いとなつた。

「それではいざ『江良』へ、出港！」

海賊船『ルシフェル』は、『鳥井港』を出港して、東の国『江良』
に向かった。

次回「さらばジャンパー！江良城炎上！」をお楽しみ。

キャスト

ティナ…赤髪に黒い目を持つ少年、この物語の主人公

ブラッド…「赤毛のブラッド」として海軍・海賊に恐れられている。
ルシフェルの船長

バージ…5人衆の一人。ブラッドの幼馴染。一等航海士として舵を
任されている。最強の剣士

劉^{りゅう}…5人衆の一人。コック長。武術の達人。その正体は、シン国の
皇太子。

ヒューベリック…ドクター助手。白魔法・薬学の権威。

テル…ジャンパー国 天皇直属の忍 ティナと友達になる。

スカー…二等航海士、バージの弟子。槍術の達人

黒虎…山賊の棟梁、全国の山賊を集め、三種の神器を奪う計画を立
てる。

聖徳天皇…ジャンパー国の天皇。後の代に人は「太陽天皇」と呼ぶ。
大陰陽師でもある。

第8話「さらばジャンパー！江良城炎上！」（前書き）

八岐大蛇を撃破した『赤毛のブラッド海賊団』は、この事件の首謀者が『大將軍 大川綱吉』と知る。

ブラッド達一行はこの借りを返すべく、一路大將軍がいる『江良』に向った。

第8話「さらばジャンパー！江良城炎上！」

四大使の秘宝

第八話「さらばジャンパー！江良城炎上！」

京の都からはるか遠く離れた東の国『江良』。そのほぼ中央にそびえ立つ居城『江良城』。その天守閣には黄金で敷き詰められた一室があつた。そこに大將軍 大川 綱吉がいた。

綱吉は本多・半蔵の書状を読んで、作戦の失敗を知った。

「半蔵の奴め、失敗しおつて。兵二千も失つて失敗とは無能にも程がある！」

綱吉は苛立っていた。天皇の権威を陥れるために、自分の兵を失つてまで自作自演を演じて失敗なのである。損失以外何物でもない。本多にも労をねぎらつてやらないといけない。複雑である。

「しかしあの異人共は何者なのだ？井伊はおらぬか！」

側近の大老を呼んだ。

「井伊よ今回邪魔をした異人共の事を調べよ。このままにしておくのは実に腹立たしい」

「ですが將軍、まず本多殿の労をねぎらつてやるのが先決かと、間違つても二千人の兵を失つた事で罰する事はお止め下さい」

「分つておる。それより異人を調べさせる。そして伊田忍軍を送り出し抹殺せよ」

何か言いたそうな大老を制して黄金の部屋から出て行つた。

海賊船『ルシフェル』は、鳥井を出港して外海に出ていた。その後北東に向かつて舵を取った。船は黒潮海流に乗り、風をつかまえて順調に進んでいた。

ティナは取舵側（左側）デッキに出て、海と陸を見ながら、テルの事を考えていた。

あの戦いからテルに会う事が出来なかった。鳥井を出港する時も何度も振り返った。しかし彼は現れなかった。この国を出ればもう会う事が出来ないだろう。もう一度会いたかった。ティナはテルとの運命を感じたからだ。

「どうしたこんな所で」

ブラッドが声をかけた。

「ブラッド。何も無いよ。ただ考え事をしていただけ」

「何も無いような顔をしていないな。あの少年の事を考えていたのか？」

ブラッドが的を射る。ブラッドには何もかもお見通しかな？と思いきり笑ってしまった。

「何が可笑しい？」

「ブラッドは凄いな。と思って」

「あの少年が運命だったとお前が感じるならいつか会う事が出来る。それが運命というやつだ」

ブラッドがティナに優しく話す。

「そうだね。信じるよ。ブラッド」

ブラッドの一言で勇気を貰った。人とはある意味、自分で答えを探し出している時がある。でも背中に”ポン”とひと押しして欲しいのだ。人は他人に相談する時でも、すでに自分で答えを持っている。そして人に相談して、改めて納得するのだ。一番いけないのが自分と違う意見を持った人間を否定して、自分の意見と会う人を探して相談する人である。無駄な浪費であるし、色々な意見をまとめて答えを作り出せないのである。相談に付き合わされる方も大変である。

ブラッドはたった一言で”ポン”とティナの背中を押したのだ。

「でもブラッド今回は散々だったね。遙か東のジャンパーまで来て、お宝も無かったし大損害じゃないのかな？」

ティナがブラッドを氣遣った。

「そうだな」

ブラッドは笑いながら答える。

「実は鳥井にいたティアナが、ずっと船に残っただろう」

「ティアナの野郎が、勝手に西方のお宝をこっちで売りさばきやがった」

「東方には西方の文化が殆どないからな。バカうけだ。三倍、五倍、一番高く売れたのは三十倍で売れたそうさ。相当珍しかったのだろうな。しかも二十年に一度の祭りがあるから毎日違う観光客が珍しがって買いにくる。気づいたら、利益が入港する前の五倍になっていた。今やルシフェルは金の山だ」

ブラッドは高笑いしている。

「ティアナ凄いな」

ティアナの経理能力と販売能力に驚いた。とても森の種族エルフとは思えなかった。

「でも船に帰ったら、『どうせお宝手に入らないと思ったから、お金作って置いたわ』だってさ」

「ティアナは何でもお見通しだね」

「しかも売り上げのお金で、東方のお宝も買い占めたらしい。西方でも高く売れるのだろう。これじゃ当分頭が上がらないな。ティアナには……」

ブラッドとティナは二人で笑った。でもその組織を作りまとめあげ、人を引き付けているのはブラッドあなただよ。ティナは心の中で呟いた。

「さあ明日には江良湾だ。一つ大きな花火を上げて帰るとするか」
イタズラをする子供のような笑顔でブラッドが話した。

『江良城』では大將軍綱吉に大老井伊が報告書を持って天守閣に

やってきていた。

「將軍、異人の正体が分かりました」

大老井伊が報告書を差し出した。

「うむ。して奴らは何者だ」

「奴らは『赤毛のブラッド団』と呼ばれる海賊であります。全世界から国際第一級の指名手配をされている大物の海賊団でございます」
大老井伊が報告書を読んで説明した。

「海賊だと？しかも第一級手配の？何故こんな奴らがワシの邪魔をしたのだ？」綱吉が大老井伊に聞いたが、井伊も見当が付かない。

その時、側近の者数名が大慌てで天守閣に現れた。

「殿大变でございます。巨大な海賊船が江良湾に現れました」

「何？どうということだ」

將軍は江良湾を見た。

江良湾には大きな帆に『ドクロと六本の羽のマーク』、何十もの大砲を準備した、ガレー船最大級のガリオン型海賊船『ルシフェル』が現われた。

「あのマークは間違いありません。赤毛のブラッド海賊団の母船『ルシフェル』です」

小型望遠鏡で確認しながら井伊は答えた。

「おのれ海賊風情が、我が領地に取り込んで来るなどナメおって！」
湾内の防衛用の大砲をすべてあの海賊船に打ち込め！」

怒り狂った綱吉が指示を出した。

綱吉の指示に従い、湾内の全てに設置されている大砲を『ルシフェル』に向かって発射された。

約270度からほぼ同時に発射された大砲は轟音と共に『ルシフェル』に向って飛んでいき水しぶきが舞った。

突然の巨大船の入港に驚いた江良住民であるが、続々と兵隊が湾内を囲み、しかも全大砲を打ち出したのである。驚きが恐怖へと変

わってきていた。辺りは騒然としていた。俗に言う『黒船』襲来のようなものである。戦争が起こるのか？平和ボケしていた江良住民の緊張は一気に高まった。

大砲の砲撃を小型望遠鏡で覗いていた綱吉は、高々と上がる水しぶきを見ていた。

「これでは生きていまい、コツパ微塵だ」

綱吉は勝ち誇った。しかし…。

「殿、敵は無傷です」

「何？」

綱吉は慌てて小型望遠鏡で見直した。

高々と上った水しぶきの中から、『ルシフェル』が現われたのである。

『射程距離外です。砲弾が届きません！』

側近の言葉に、綱吉は歯を噛み締めた。

「どうやら敵さんは俺たちの事を知っているようだ。じゃなかったら、入港しただけで全砲弾打ちこんで来ないだろう」

ブラッドがニヤニヤしながら言う。緊張感はずゼロである。

「あなたが將軍の計画を潰すからでしょ」

ティアナが突っ込む。

「あれは流れだよ。後から知った、將軍の事は」

「あらそう」

ティアナ聞き流した。

「さてお返しはキツチリしないと。スチワート・ニック。奴らの大砲を派手にぶち壊せ」

ブラッドが砲撃長・副砲撃長に命令した。

「了解！」

右舷・左舷に分かれたスチワートとニックが、砲撃員にそれぞれ

支持をした。そして全砲門から大砲を発射した。

轟音と共に発射された砲弾は、数十の敵の防御用大砲を爆音と共に的確に破壊した。砲撃長スチワートが鍛えぬいた、砲撃部隊は百発百中の自信を持っているのである。

湾内は騒然としていた。殆どの防御用の大砲は破壊され黒煙をだしているのである。

「殿、殆どの大砲は破壊されました。しかもこちらの大砲の射程距離では、あの船には届きません」

「分かっておる」

綱吉は西方と技術の差をまざまざと見せつけられた。

「はははこれで將軍とやらも、少々懲りただろう。スチワート・ニツク『あれ』を城に打ち込んでやれ」

「またもやブラッドがイタズラ好きの子供のような顔になっている。了解！」

スチワート・ニツクが砲撃員に指示をした。すると武器庫から全長五メートルはあろうかという巨大な大砲を砲撃員数名が運び出してきた。その上には巨大な望遠鏡が付いている。

「いつのまにこんな物作ったの？」

ティナはニツクに聞いた。一ヶ月前には無かった代物だ？ニツクは振り返って『にや』とした。『あつ！』ティナは気付いた。スチワートとニツクは伊予に数週間いた。その間にガラクタを集めさせて、鳥井に送り船の中で新作の大砲を作っていたのだ。

『ガラクタじゃない』ニツクは言っていたが、ガラクタを集めてこんな物を作ってしまうとは天才だ。ティナは改めて二人を尊敬した。

「狙いはあの城の天守閣だ。試し打ちだとはいえ外すなよ」

ブラッドは狙いを指示した。スチワートは望遠鏡で狙いを定めながら、砲撃員に角度を調整した。湾内の僅かな波の動きに合わせながらタイミングを計った。

「撃て！！」

という指示と共に、巨大な砲弾が発射された。

「何をしておる無能な奴らめ。早く海兵隊を送るのだ。奴らの船に乗り込め。数で押すのだ！」

綱吉が我を忘れ、怒り狂ったように指示をした。

その瞬間である。ルシフェルから轟音が轟いたかと思うと、砲弾が城の天守閣の屋根をぶち抜いた。

爆音と共に屋根は粉々となり、辺りは残骸と埃で埋め尽くされた。「殿、殿ご無事ですか？」側近達は慌てふためく。

「おのれ海賊どもめ。八つ裂きにしてくれる。海兵隊をすべて出し皆殺しにせよ！」

綱吉は支持を与えたが、それは怒りでは無く恐怖だった。技術の差は否めないが、数キロ離れた城まで打ち抜く大砲を持っているとは思わなかったのである。

その時、慌てふためいて下の階から兵士から側近が上がってきた。

「殿。一大事でございます！」

側近が血相をかえてやってきた。

「分つておる。天守閣もやられた。奴らは皆殺しにしてくれる！」

「違います。たった今天皇陛下から書状が届いております」

「そんな物後でよい」

「ですが陛下は大將軍に謀反の疑いがあり、即刻『綱吉』候には隠居して頂き弟の『家綱』に家督を譲られよ。との仰せでございます。従わぬ場合は、天皇勅命にて各藩に大川家討伐を命じる。とのことです」

側近が震えながら伝えた。

「何？あの小僧何を証拠にそんな事を！」

綱吉は怒りに震えながら側近に怒鳴った。

「実はこれを…」

側近は將軍に手渡した。それは半蔵が山賊棟梁黒虎に与えた指示書であつた。燃えかけているが、間違い無く半蔵の字であつた。

「陛下はこの密書を幾つか抑えているとの事でした」

「なに？」

將軍が怒りに震えた。

その時である。爆音と共に天守閣が揺れて崩れ始めた。今度は城の中腹を狙つて大砲を打ち込んだのだ。その振動で將軍は倒れこみ立ちあがれなかつた。いや立てる氣力がなかつたのだ。今になって気づいたのだ、すべてを欲するためにすべてを失つた事に…。『策士、策に溺れる』という事である。余りにも大きな欲望はすべてを滅ぼすのである。

巨大砲が城の中腹を打ち抜いたのを確認してブラッドは満足した。

「デカイ一発は食らわしてやった。それでは全速で逃げるぞ」

ブラッドが号令をかけた。「おう！」クルーの掛け声と共に撤退を始めた。

海賊船『ルシフェル』は外海に出て南下しようとしていた。

江良湾での撤退劇も凄まじかつた。海兵隊の軍艦が十数隻、ルシフェルを追いかけてきたのだ。しかしブラッドは湾内という状況を利用した。狭い湾内では動きを制限されてしまう。それで先頭の船を徹底的に攻撃した。先頭の船は炎上して、身動きが出来なくなつた。その炎上した船が壁となり、後ろの軍艦が身動き取れない状態にしたのだ。その間に外海出て逃げだしたのである。

外界に出てルシフェルが帆をはり全力で南下しようとした時である、南方より五隻の艦隊が現れたのである。

「挟み撃ちか？思ったよりやるな」

ブラッドは予想外の展開に驚いたが、的確に指示をした。

「真正面から突っ込むとやばい。これから奴らと接触する前に徐々に取舵（左側）に舵を切る。右舷側に砲弾を集中して一番左側の船を沈めるぞ。そのまま沈みかかった船を盾にして、奴らを振り切る。全砲右舷側に集中させる！」

ブラッドの指示に砲撃手達が慌しく作業をする。航海士達は帆の位置を徐々にずらしながら左に風を取り込む。

艦隊が近づき、緊張が走る中、二等航海士スカーが敵艦の様子に気がつく。

「ブラッド船長。様子がおかしい」

スカーの一言で、ブラッドは双眼鏡を覗いた。

艦隊の中央の船が、白旗を振っているのである。しかもその白旗を振っているのは少年だ。

「ティナ上がってこい！」

ブラッドが大急ぎでティナを呼んだ。艦隊は迫っている。もう少しで砲撃戦が始まるからだ。ティナは大急ぎでブリッジに上がった。「これを見る」

ブラッドは双眼鏡を渡した。

「テル！」

双眼鏡を覗いたティナが叫んだ。ブラッドは砲撃を止めさせた。後1分遅ければ、左舷側の船は海に沈んでいただろう。

五隻の艦隊の隣にルシフェルを停泊させ、ブラッド・バージ・マシュー・ゴルディバ・ティナの4人は艦隊の司令船に乗り込んだ。もちろんまだ臨戦態勢である。ルシフェルでは全砲門が開いており、ヒューベリック達魔法使いが呪文を唱えている。副船長のティアナの周りには精霊達が飛んでいる。ゴンゴ達狂戦士部隊は今にも飛びかかるうとしていた。

「船長のブラッドだ。俺たちに何の用だ」

「私は天皇直属の忍『海猿』が棟梁長衛と申す。天皇の命によりここに参った」

「天皇様が俺たちに用事とは、八岐大蛇の仕返しなのか？」

「いやいや天皇陛下は感謝しておるのだ、よく三種の神器を守って下さった」

長衛は深々と頭を下げた。

「陛下よりお礼がしたいという事で、これを用意した」

長衛が指示をすると次々と見た事も無い宝が運ばれてきた。

「これはジャンパーに伝わる国宝級の宝ばかりだ。西方には無い、東方の宝である。珍しいであろう。これを受け取ってほしい」

「これは有り難いが、腑に落ちない。何故ここまでしてくれる。俺は八岐大蛇を切った本人だ」

ブラッドは聞き返した。世の中おいしい話などそんなに無いのである。

「ははは気になされるな。陛下は八岐大蛇の呪術を掛け封印したが、京の都から距離が離れていた為に制御が出来なかった。そちが倒してくれなかったら、その場にいた一万もの兵は全滅していたであろう。それを止めてくれた君達に陛下からのお礼である」

「それともう一つのお願いだ、このテルを乗せてやってほしい」「えっ！」

ティナが叫び、テルを見た。

「こやつはいつの間にか陛下にお目通りしており、宝剣まで頂いておる。そして陛下から直接のご命令でテルを君達に預けたいそうだ」

「陛下はこれからの時代を見据えて、自分の代わりに俺に世界を見て来いと仰せになられた。そしていつか帰ってきて祖国のためにその経験を生かして欲しいと言っていた」

テルが説明する。

「でも俺たち海賊だぜ？」

「陛下はその事も知っていた。しかしティナと会い、八岐大蛇を倒して『三種の神器』を奪わなかった船長をいたく気にしていた。」

あなた達なら大丈夫であろうと」

テルはティナとブラッドを見た。

「えらく気に入られたものだな。まあいいお宝を頂いたからって特別扱いはいしない。一般のクルーのように扱うぞ」

ブラッドが許可した。

「やった！」

ティナがテルに抱きついた。

「將軍家の大艦隊がこちらに向ってきました」

海猿の部下が長衛に伝えた。

「お邪魔が入ったようだ。將軍家の艦隊はこちらで誤魔化しておこう」

長衛が時間稼ぎをする事をブラッドに話した。

「すまない」

ブラッドはルシフェルに乗り込こんだ。

別れ際に、長衛はブラッドに話しかけた。

「船長、テルは甘いところだらけだ。ご迷惑をお掛けすると思います。何とぞよろしくお願い致します」

長衛は深々と頭を下げた。これは『海猿』棟梁としてでは無く、父としての願いだろう。

ブラッドは高々と手を上げて答えた。

「テルよ。行って来い。迷惑を掛けるなよ」

父の言葉にテルは涙を堪え切れなかった。そして大きく手を振った。もう会うことの出来ないであろう。父に…。

「よし野郎ども、出発だ！」ブラッドは五隻の艦隊を背に大海原を南下して行った。

また新たな冒険にむけて…。

黄金の国編 「完」

次回より「アーク大陸編」をお送りいたします。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

キャスト

ティナ…赤髪に黒い目を持つ少年、この物語の主人公

ブラッド…「赤毛のブラッド」として海軍・海賊に恐れられている。海賊船「ルシフェル」の船長

ティアナ…海賊船ルシフェルの副船長兼経理担当。森の種族「エルフ」にしてブラッドの妻

バージ…五人衆の一人。ブラッドの幼馴染。一等航海士として舵を任されている。最強の剣士

ゴルディバ…五人衆の一人。甲板長。巨漢ながら性格は温厚。ただし戦いの時は狂戦士となる

スチワート…五人衆の一人。砲撃長。最高の狙撃手。新兵器開発が趣味

マシユー…五人衆の一人。通信長兼ドクター。白・黒魔術の最高位の魔術師。趣味の新魔術の研究

劉^{りゅう}…五人衆の一人。コック長。武術の達人。その正体は、シン国の皇太子。

スカー…二等航海士、バージの弟子。槍術の達人

ゴンゴ…副甲板長、ゴルディバの弟。兄と同じ巨漢で狂戦士。

ニック…副砲撃長、狙撃手。スチワートと同じで新兵器開発が趣味
ヒューベリック…ドクター助手。白魔法・薬学の権威。

パリス…副料理長。武術家。劉^{りゅう}を崇拜している。

テル…ジャンパー国 天皇直属の忍 ティナと友達になる。

聖徳天皇…ジャンパー国の天皇。後の代に人は「太陽天皇」と呼ぶ。大陰陽師でもある。

大川 綱吉…シャンパー国大將軍、三種の神器を奪う事を企てるが、
ブラッドの活躍により失敗
長衛…天皇直属の忍『海猿』棟梁、テルの父親。

第9話「四大天使物語」(前書き)

ジャンパーを出港した海賊船『ルシフェル』は一路南下、アーク大陸へと向っていた。

その船内でティナとテルの会話から『四大天使』の謎が語られる。

第9話「四大天使物語」

四大天使の秘宝

（アーケ大陸編）

第九話「四大天使物語」

『ジャンパー』を出港した海賊船『ルシフェル』は、マストを広げ風に乗り南下していた。『ジャンパー』を出港して一ヶ月が立っていた。

『ジャンパー』から乗船ようになったテルは、劉りゅうのいるコック場で働くことになった。元々手先が器用である。すぐに戦力となり、コック場で可愛がられた。特に劉りゅうは、同じ東方の民族であるテルが可愛いようだった。忍であるテルは、体術も優れているの呑み込みが早く、劉りゅうの拳法教室でもすぐに慣れていた。

「凄いよテルは。料理もすぐ出来て、劉りゅうに武術まで教えてもらって、羨ましいよ」

マストの上でワッチ（監視）をしているティナが呟く。テルがマストの上まで上がってきて遊びに来たのだ。

「そんな事無いよ、料理の腕はまだまだだし、『拳法』だって奥が深い。自分が未熟だった事を知らされたよ。しかし俺から見たら、ティナの方が羨ましいよ。あのブラッドとバージから直接剣術を学んでいるのだから。普通ないよ、こんなスペシャル講師」　テルが逆にティナを羨ましがる。

「ブラッドとバージは元々同じ村で育ち、同じ剣術を習ったのだった。でも得意技が違う、ブラッドは二刀流だし、バージは突き。だからバージが教えているところに、ブラッドがたまに来て教えてくれるのさ。ブラッドは暇つぶしだろうけどね」

「それでも凄いよ。あまのむすめ天叢雲剣を使つたとはいえ、あの八岐大蛇を倒したブラッドに直接教えて貰うなんて贅沢だよ」

テルが羨ましがる。そういえば殆どのクルーがブラッドに教えて貰っていない。やっぱり特別なのかな？と思うとティナは嬉しくなった。

「ところで『四大天使の秘宝』ってなんだ？『三種の神器』は違つたのдар？」

テルが疑問に思っていた秘宝の事を聞いてみた。

「そうかテルは知らないよね。『四大天使の秘宝』は俺たちが信仰している宗教の中で、西方の民に語り継がれている伝説だ」

「今から2千年以上も前の発見された石碑に書かれていた伝説だよ。それが聖書となつて語り継がれている。昔『神』に仕える天使の中で、最上位に位置していた五人の天使がいた。五人の名は『ルシフェル』『ミカエル』『ガブリエル』『ラファエル』『ウリエル』と呼ばれていた。その大天使の中で司令官として最高位にいたのが『ルシフェル』なんだ」

「ルシフェルってこの船の名前と同じだね。何か関係あるのかな？」

テルが聞く。ティナは分らないよ。と答え話を続けた。

「ルシフェルは六本の大きな白い翼を持ち、神の使いでありながら神と同等の力を持っていたと言われていた。他の大天使達も彼を兄のように信頼して尊敬していた。そしてルシフェルは全ての天使を纏めて世界を平和に納めていたんだ」

「カッコイイね。ルシフェルって」

テルは物語にワクワクしていた。ティナは笑顔になったが、ふと暗い表情になつて、海の水平線を見ながら続きを話し出した。

「そのルシフェルが、突然闇の奥深くに住む、闇の住人『悪魔』の軍勢を引きつれ『神』に反旗を翻した。理由はわかっていない。し

かしルシフェルは仲間である天使達を次々に倒し、ついに『神』に手をかけようとんだ。ルシフェルは悪魔王『サタン』と名をかせ、白く鮮やかな六本の天使の羽は黒い羽根と変わっていた。『墮天使』となってしまうた。ルシフェルが『神』の息の根を止めようとした時に、彼を止めたのが元同僚だった、『ミカエル』『ガブリエル』『ラファエル』『ウリエル』の四大天使だ」

ティナの話テルは、ごくりと唾を飲み込んだ。

「四大天使は元々ルシフェルの副官である。彼の強さを一番知っているのが、四大天使だった。だから彼らはルシフェルに勝てないまでも封じる事にした。彼らの戦いは十日間続いたとも言われる。大地は裂け、嵐や雷がこだました。地形も変わってしまったらしい。その凄まじい戦いの中、一瞬の隙を見つけて、四大天使は結界を張り悪魔軍と共にルシフェルを地獄へと封じ込める事に成功したんだった」

ティナの話聞きながら、息をするのを忘れていたテルは、ふうと息を吐いた。

「四大天使はルシフェルの復活を恐れ、自分の分身を形にして地上に使わした。悪魔たちを封印するために。その分身が東の『ミカエル』の『炎の剣』、北の『ガブリエル』の『水の槍』、西の『ラファエル』の『風の弓』、南の『ウリエル』の『地の盾』なんだ。ルシフェルを封印するための結界の為に、そしてもしルシフェルが復活した時に対抗出来る唯一の武器として。それが四大天使の秘宝だ」

ティナは一気に話した。

「凄い話だな。ドキドキしたよ！」

テルが興奮して話した。

「まあ二千年以上も前に発見された。石版に書かれている事だから、どこまで本当か分らないけど、僕たちは石版に書かれた言葉を写した『聖書』を子供の時から読んで過ごしたんだ」

「でも何で『四大天使の秘宝』と言われているんだ？」

「初めは西方の国々を司祭や信者が探し回った。悪魔から保護する

ためにね。でも見つからなかった。しかしここ数百年で大航海時代を迎えた。探す範囲が世界中となった。いつしか冒険家や海賊が家宝と位置付けてしまったんだ。『四大天使の秘宝』ってね。一つ手に入れられたら、国を丸ごと買う事が出来ると言ってる。しかし誰も見つけることが出来なかった。いつしか探す冒険家や海賊も殆どいなくなり伝説の宝物になってしまった」

「そうか。その『殆ど』の一つが『赤毛のブラッド』海賊団だね」
「でもその四大天使の秘宝は封印なのだろ？それを解いてしまうと墮天使ルシフェルが復活してしまうじゃないか？」

テルが首を傾げながらティナに聞いた。

「えっ？そういえばそうだよな？そこまで考えてなかったよ」

ティナが困惑して答えた。

「まあ伝説だからな？」

テルが笑いだした。

しかし、ティナに不安がよぎった。ブラッドはなんで四大天使の秘宝に拘るのだから？『ルシフェル』ってどうして名付けたのだろう？気になってしまった。

夕陽を見ながらブラッド船長はブリッジの上で考え事をしていた。その隣にティアナが来て佇んだ。

「どうしたの？何か考えごと？」

ティアナはブラッドに聞いた。

「いや何でもないよ。夕日が綺麗だなと思って、それに久々にアーク大陸に行けるからな。楽しみでね。ワザワザ東方まで来たからなもう行けなかったかも知れないし」

「本当かしら？」

ティアナが疑わしい目でみる。

「本当だよ。あそこには珍しい動物や生き物がいる。今度はどんな発見があるか楽しみだ。今回は動物好きのゴルディバ・ゴンゴ兄弟を連れて行かないと怒るよな」

「ゴルディバ・ゴンゴのあのデカイ体に抱き付かれたら、動物もビツクリするでしょうね」

「最初は怖がるけど動物は感覚で分かるのだよ。人の優しさが…。ティアナも久々の森だからゆっくりして行きなよ」

ブラッドが森の種族エルフのティアナを気遣う。

「そうさせてもらうわよ。珍しい植物があつたらもってこなきゃね。ブラッドも早く入りなさいよ、風邪引くわよ」

ティナはブラッドと話をし、寝室へと戻って行った。

「ああ」ブラッドは夕陽を眺めた。その瞳は深い苦しみに彩られていた。彼の右の手首には黄金に輝くブレスレットが、夕日に輝いていた。そこには『逆十字』が描かれていた。

一週間後、サロンでティナは航海士のクルー達と夕食を食べていた。

「美味しい。これジャンパーの料理？何て名前なの？」

ティナがフルーツを運んできたテルに聞いた。

「天ぷらと寿司という料理。ジャンパーは海に囲まれた島だから魚をよく食べるんだ」

「生の魚は怖かったけど、意外と美味しいね。この天ぷらも」

ティナは初めて食べた生の寿司に驚く。

「新鮮な魚が釣れたからね。それも大物。それで劉コック長に頼んで作らせてもらったのさ」

食糧確保も立派なコックの仕事である。船の共に釣りをたらし、いつも魚を取っている。

「これから行くアーク大陸ってどんなところ？」

「俺も行った事無いけど、物凄く大きな大陸で大自然に囲まれているらしい。ブラッドの恩人がいるらしいけど。よく分からない」

テルの質問にティナが答えた。

「まあ楽しみだな。」

テルがワクワクしながら答えた。彼には初めての外国である。

「そうだ！大自然に囲まれていて、可愛い動物達、珍しい動物達の宝庫だ！」

話を聞いていた。ゴルディバ・ゴンゴ兄弟が楽しそうに寄って来た。赤毛のブラッド海賊団最強戦士にして「狂戦士」。しかし兄弟は、無類の動物好き、しかも可愛い動物には「目」が無い。船にも沢山の小動物を持ち込んでおり、動物達が悪さをするので困っているが、二人が怖くて誰も文句を言えない。しかし身長230cmの大男に抱かれる小動物の気持はどんな気持ちなのだろう？と考えるゾツとする。

「何百万ヘクタールの巨大な森には、まだ未発見の動物が沢山生息しており、広大な大地には何百・何千の動物の集落がある。砂漠地帯にも色々な動物が生息しており、まさに生き物の楽園だ！」

ゴルディバとゴンゴはテルが運んできたフルーツを殆ど平らげながら話した。

「凄そうだね。人は住んでいる？」

ティナは質問した。

「もちろんだ。もともと原住民が住んでいた。数々の遺跡も発見されている。しかし大航海時代を迎えてから、近代兵器を用いて西方の国々『ポートギース』『オータン』『ブルツ』『イリア』が『アーク大陸』を四分割して占領している。酷い話だ。まあそのため本土から沢山の移民が移っているから言葉には支障はない」

兄弟は簡単に説明した。

「ブラッドの恩人って移民して来た人なの？」

ティナは聞いてみた。

「いや現地の奴らさ、まあちょっと普通じゃないだけだね。それは後のお楽しみだ」

ゴルディバは意味ありげに答えた。

「まあ俺たちはアーク大陸に行った時に、秘密に動物の狩りをしてる『ハンター』達を尽く懲らしめてやった。それで現地の奴らと

も打ち解けて仲良くなったのさ」

ゴルディバは説明した。フルーツの皿は既に空になっていた。小動物が好きな二人は大の甘いものの好きでもある。

「大陸では俺が案内してやるよ。それじゃ早く寝ろよ」

兄弟は寝室に戻って行つた。

「なんかワクワクしてきたな」

「うん」

ティナもワクワクしていた。

数日後、『アーク大陸』が見えてきた。快晴で海鳥達が出迎えてくれた。ティナとテルは海鳥達と戯れながら『アーク大陸』を眺めた。これから起こる『大冒険』に、期待に胸を躍らせて。

次回「大地の国、アーク大陸」をお楽しみに。

キャスト

ティナ・・・赤髪に黒い目を持つ少年、この物語の主人公

ブラッド・・・「赤毛のブラッド」として海軍・海賊に恐れられている。ルシフェルの船長

ティアナ・・・海賊船ルシフェルの副船長兼経理担当。森の種族「エルフ」にしてブラッドの妻

ゴルディバ・・・五人衆の一人。甲板長。巨漢ながら性格は温厚。ただし戦いの時は狂戦士となる

ゴンゴ・・・副甲板長、ゴルディバの弟。兄と同じ巨漢で狂戦士。

テル・・・ジャンパー国 天皇直属の忍 ティナと友達になる。赤毛のブラッド海賊団のコックとなる。

第10話「大地の国 アーク大陸」(前書き)

ようやくアーク大陸にたどり着いた『赤毛のブラッド』海賊団であるが、思いがけぬ強敵の影がアーク大陸を覆っていた。
これから彼らの壮絶な戦いが始まる。

第10話「大地の国 アーク大陸」

四天使の秘宝

「アーク大陸編」

第十話「大地の国 アーク大陸」

深い霧に覆われていた。海賊船『ルシフェル』がアーク大陸を発見してから、十五時間がたっていた。対岸沿いに東に船を走らせた。ポートギース領キングスランドの港町『ブルトニー』に向っていた。アーク大陸は肥沃な大地が多く、森や人の住む地域は限られている。だから直ぐに上陸せずに、人が住んでいる『ブルトニー』に向っているのだ。

アーク大陸はガニーシャ大陸西方の国々が、先住民を追い払い侵略して現在は四つの領に分けられている。『ポートギース領キングスランド』、『オータン領グリーズ』、『ブルツ領ロツクウエル』、『イリア領サウスロツク』である。アーク大陸は森が密集した地域と肥沃な大地がある地域と分かれる。『ポートギース領キングスランド』と『オータン領グリーズ』は森に囲まれた地域で豊富な資源に囲まれている。『ブルツ領ロツクウイル』と『イリア領サウスロツク』は、自然の資源は殆ど無いが、石炭などのエネルギー資源が沢山取れている。どちらの方が、利益になっているのかはまだ分かっていない。

入港する頃には明け方になっており、港には深い霧に覆われていた。しかし貿易が盛んなこの港は、二十四時間体制で入港が大丈夫なのである。ブラッドは湾内に船を進めた。

霧が深いため、湾入口の両サイドの灯台の明かりをたよりに湾内の港へと向っていった。

しかし様子がおかしい。いくら明け方とはいえ、静か過ぎる。クルー全員に緊張が走った。

港が目前に見えてくると、霧の中からルシフェルを取り囲むように松明の炎が一成に上った。

「囲まれている！」

ブラッドがクルーに警戒を促した。

少しずつ霧が晴れて行くと、そこには武器を構えている、住民たちが船を囲んでいた。

「海賊達はこの港から出て行け！」

住民の一人が代表して大声を出す。

「俺たちは補給に來ただけだ！」

ブラッドが説明をする。

「嘘をつけ奴等の仲間だろう。騙されないぞ！」

「奴等？奴らとは誰だ？」

「しらばっくれて、鋼の海賊団ハマーン一味だ！」

住民たちがはき捨てるように言った。

聞いたことのある名だ。この辺一帯を縄張りになっている、悪名高い海賊団である。ブラッド自身は海域が違うので会ったことは無いが、評判は聞いている。

「ブラッドこの住民など直ぐに蹴散らせる。それで一旦引いてはどうだ？」

一等航海士バージが提案する。住民の群れなど赤毛のブラッド海賊団には赤子の手を捻るようなものだ。

「いや住民を傷つけるわけにはいかない」

ブラッドが困っているところに一人の老人が住民達に声をかけた。
「待ちなさい。彼らは敵では無い。武器を下ろしなさい」

「しかし管長、奴らが何者か分かりません」

「分かっておる。彼らは我らの恩人じゃ」

「パンじい。生きていたか？」

ブラッドが懐かしそうに答える。

「パンじいではない。パン管長じゃ」

パン管長はニヤツと笑う。

港の管理室の一室にブラッドとティアナとバージは通された。すると直ぐにパン管長がやってきた。

「パンじいがこの港を管理する管長になっていると思わなかったよ」

「はははブラッドも久しぶりだな。他のお二方も元気そうで何よりティアナとバージが頭を下げた。」

「十数年ぶりだな。ワシが生きている内に来てくれて嬉しいよ」

「俺はとつくにくたばったと思っていたよ。しかしこの港の異変は何だ？」

「相変わらず口の減らない男だな。ははは実は1年ほど前に大海賊団『鋼のハマーン』一味が港に押し寄せ、この港を荒らして行つた。最初は海軍も対抗したが、全滅させられた。もう海軍の援軍も来ないようになった。奴らはそれをいい事に、住民の若者を殆ど連れ去り、森の奥深くに行ってしまった。今でも何ヶ月に一回、また若者を徴収しに来るのさ。我らはもう耐えられなくなり、奴等と戦うことを決めた。その時にお前さんたちが現れたのじゃ」

パン管長が説明した。

「ハマーンかゝやっかいな相手だな。森の奥には何があるのだ？」

「この森の奥には、このアーク大陸の先住民が築いた遺跡がある。」

イサーク王朝時代の遺跡だ。今から千年程前に栄えた文明なのだが、そこには王家の財宝が眠っているという伝説が先住民の中で残っている。その財宝を目当てに、住民を使つて遺跡を掘り返しているよ
うじゃ」

ブラッドは話を聞き終えて、ちよつと間をおいて話し出した。

「ハマーン達は俺らがやつつけてやる。そのかわり遺跡のお宝は頂
くぜ。それでどうだ？」

ブラッドは提案した。ハン管長は少し考えて答えた。

「すまない。またお前達に迷惑をかけるな」

「お宝の為さ。あんたらは関係ない」

ブラッドはテレながら答えた。

港ではまだ上陸を許可されていなかった。そこへブラッドとティアナとバージが帰ってきた。

「上陸の許可が下りたぞ！」

ブラッドがいうとクルーは喜んだ。1ヶ月ぶりの陸である。嬉しいはずだ。

ブラッドは幹部達を集めて作戦会議を開いた。その間クルー達は自由行動である。ティアとテルも町に出た。

会議にはブラッドとティアナそして五人衆が出席した。

「という訳で、鋼の海賊団ハマーンをぶっ潰す。いいな！」

ブラッドが説明した。

「しかし、鋼の海賊団の噂は知っているだろう。五隻の巨大船団を引き連れ、そのどの船長も一級海賊だ。まともに遣り合えば分が悪いぞ？」

砲撃長スチワートが言う。

「五人衆一人で一隻だな」

ブラッドが押し付ける。

「オイオイ勘弁してくれ。一隻に百人、二百人はいるぞ。それに鋼の海賊直属の鋼の軍団は、どんな武器も魔法も通じないらしい。どうする？」

「鋼の軍団の鎧には、防御魔法が施されているのだろう。それ以上の魔力を持った者が、鎧を壊せばよい。もしくはこちらも武器に魔法を掛ければよい」

大魔術師マシューがいう。

「まあ情報収集が先だ。俺もまともにぶつかる気は無いからな！」

「まずは少数で遺跡を調べる。パーティーを作るぞ。俺はティアナとバージとゴルディバとそれにヒューベリックを連れて猫族の猫爺に会いに行ってくる。バージとゴルディバはそれぞれ数名選抜してくれ。劉は数名を連れて遺跡に潜入してくれ」

バージとゴルディバと劉は頷いた。

「スチワートとマシユーは待機、船もマストをたたんでなるべく目立たないようにしてくれ。海賊が現れたら住民を守って、奴等を叩いてやれ。港での遊びは『ほどほど』にな」

スチワートとマシユーが頷いた。まあ陸に上った海賊が『ほどほど』にするのは大変だが、お金も使うから何とか住民は許してくれるだろう。

「出発は明朝にする、選抜・準備を済ませるように。解散！」
会議が終了した。

テルは初めての海外に興奮していた。完全に観光客になっていた。「凄いや全然文化が違うね。見たことも無い物ばかりだ。皆目が青いし髪は金髪だ！」

ティナは当たり前だろう？と思いながらテルと行動していた。その時である、広場の方で人だかりが出来ていた。「喧嘩？」クルーの誰かがまた暴れているのかな？と思い広場に駆けつけた。

「このくそ『猫』の分際で、俺達をバカにしやがって皮を剥いで店に売り飛ばすぞ！」

3人の大男達が喚いていた。しかしその相手は少し大きめの『猫』である。しかも両足で立っていた。

「ふん。人間が偉いとは思わないが、お主達は特に小人に見える。早くそこの子供に謝るニヤ」

猫が答えた。どうやら子供に言いがかりを付けた大男達を見て、猫が子供を助けたようだ。

「猫が喋っている？しかも派手な赤服にマントを付けて立っている。刀も持っている。やっぱり外国は凄いや」

テルが大声で興奮して話している。外国でも珍しいぞ？とティナは思った。テルとティナが騒いでいると、猫の耳がピクンと動いて後ろを振り返った。

「誰だ？俺をバカにしているのは『猫族』を知らんとはどこの田舎もんだ？」

猫はテルとティナを睨み付けた。

「いや、その海外初めてなので。ご免なさい」
テルは謝った。

「このくそ猫がバカにしゃがって無視か！」

無視された大男達が、猫に後ろから襲い掛かった。

「危ない！」

ティナとテルが大声を上げた瞬間、猫は飛び上がり、反転して大男達の攻撃をかわした。そして指先から「キラン」と光る爪を出し、大男達の顔を『ニヤニヤニヤニヤ』と掻き毟った。

大男達は呻き声をあげた。キズだらけの顔を抑え、大男達は『覚えていろよ！』と捨て台詞と共にその場を逃げていった。

「ネコさん凄い！」

テルとティナは褒めまくった。

「あんな図体がデカイ人間など俺様には楽勝ニヤ」

猫も褒められて満更ではないようだ。

「僕ティナこいつはテルです。あなたは誰ですか？」

「俺は猫族の・・・」

と名前をいいかけた時、遠くから大声を出しながら駆けてくる二人の巨人が迫ってきた。

「太郎！」

ゴルディバとゴンゴが、まるで我が子のように抱きかかえ、頬ずりしまくった。

「た・ろ・う？」

ティナとテルはお互い顔を見合わせた。どうみてもその猫は現代でいう、銀の虎毛のアメリカンショートヘアである。しかもアーク大陸でジャンパー風の名前にビツクリである。

「太郎はオヤジの名前ニヤ。俺はサスケニヤ」

物凄い勢いで嫌がつている、しかしサスケに小動物好きの巨人二人は離れない。

「そうか！息子かゝ息子もカワイイなゝ」親父殿は元気か？」

ティナとテルはサスケが可哀想になってきた・・・。

「無礼者。王子から離れる！」

後ろから二人（2匹？）の茶色の虎毛の猫が剣を抜いて現れた。

「王子？」

ティナとテルがまた顔を見合わせた。

「いやスマン。ツイツイ太郎だと思って感動して抱きついてしまった」

「猫王様みゃうさまを呼び捨てとは貴様何者だ？」

側近の猫が威嚇する。

「昔の知人だよ。」

「もうよい五右衛門・八兵衛」

サスケが止める。もうティナもテルも名前が和風なのは突っ込まなかった。

「この者は昔猫族を人間のハンター共から救って下さった。恩人だ。私も小さかったが覚えている」

「あの時の子猫かゝ覚えているよゝ」大きくなって！」

サスケに二人が抱きつこうとした時に、『サッ』と今度はかわした。

「お主達は今回何をしにきた？」

「鋼の海賊団を倒しに。そして明日猫族の王『太郎』に会いに、俺達の船長ブラッドと一緒に猫族の村に行く予定だ」

ゴルディバがさつき決まった。予定を話した。

「何？しかし今親父は病に伏せている。面会が出来るかどうか？」

サスケが暗い表情で話した。

「ならばお見舞いに行かねば。明日ブラッド達と共に行こう。今日は船に泊まっていきなさい。ブラッドも歓迎するだろう」

ゴルディバが誘った。猫達は拒んだが、『マタタビ』が沢山あると言ったら誘惑に負けて船に泊まることになった。

船ではブラッドがサスケ達を大歓迎して直ぐに宴会になった。猫達もマタタビミルクで大いに酔っ払い盛り上がった。

「そうか。太郎の容態が悪いのか？」

ブラッドが悲しんだ。猫族は普通の猫の寿命より数倍生きられるようだが、太郎は歳なのだろう。

「我が猫族は人間共のハンターと戦って、大半が傷ついていたニヤ。我らは人間を恨んでいたニヤ。しかし、お主達が助けてくれて人間を信じるようになった。我らが人間の町に来るようになったのもお主達のおかげ。お主達は猫族では英雄となっているニヤ」

サスケがマタタビで酔いながら話す。

「俺も太郎に会えてよかった。もう一度会いたいよ」

「今は問題が多い。今度は鋼の海賊団が現れて、森を荒らしている。俺達は戦おうと思っているニヤ」

「その鋼の海賊団は俺達が倒す。その為にも太郎と会わなければならない」

ブラッドは優しくサスケに答えた。宴会は夜遅くまで続いた・・・。

翌朝、ブラッド・ティアナ・バージ・スカー・ゴルディバ・ゴンゴそれにティナが、サスケ達と猫族の村に向った。テルは劉りゅうと共に、遺跡の潜入にあたった。テルがティナを羨ましがったのは言うまでもない。

次回「猛獣会議」をお楽しみ。

キャスト

ティナ… 赤髪に黒い目を持つ少年、この物語の主人公

ブラッド… 「赤毛のブラッド」として海軍・海賊に恐れられている。

海賊船「ルシフェル」の船長

ティアナ… 海賊船ルシフェルの副船長兼経理担当。森の種族「エルフ」にしてブラッドの妻

バージ… 五人衆の一人。ブラッドの幼馴染。一等航海士として舵を任されている。最強の剣士

ゴルディバ… 五人衆の一人。甲板長。巨漢ながら性格は温厚。ただし戦いの時は狂戦士となる

スチワート… 五人衆の一人。砲撃長。最高の狙撃手。新兵器開発が趣味

マシユー… 五人衆の一人。通信長兼ドクター。白・黒魔術の最高位の魔術師。趣味の新魔術の研究

劉^{りゅう}… 五人衆の一人。コック長。武術の達人。その正体は、シン国の皇太子。

スカー… 二等航海士、バージの弟子。槍術の達人

ゴンゴ… 副甲板長、ゴルディバの弟。兄と同じ巨漢で狂戦士。

テル… ジャンパー国 天皇直属の忍。ティナと友達になる。赤毛のブラッド海賊団のコックとなる。

サスケ… 猫王太郎の息子。猫族の王子。側近・・・五右衛門・八兵衛

第11話「猛獣会議」（前書き）

猫王の息子『サスケ』と出会ったブラッド一行は猫の村に訪れる。
そこで旧友猫王『太郎』に会うために猫の村に訪れる。

第11話「猛獣会議」

四天使の秘宝

くアーク大陸編く

第十一話「猛獣会議」

港町『ブルトニー』を出てから、丸2日間森の中を歩いて猫族の村『キャッツ』に到着した。町に着くとティナは驚いた。全てが一回り小さい、ミニチュアハウスが立ち並んでいた。しかも町には服を来た猫達だらけだった。お店も立ち並んでいた。

「美味しいツナカンセルやってるよ。今ならお徳パックだよ！」
黒猫の商人が大声かけた。

「こっちはマタタビ1束特売だよ！」
ちよつとポツチャリした、オバちゃんシャム猫が叫んだ。
立ち飲みのバーでは、大柄の虎柄猫が『マタタビミルク』をガブ飲みしていた。

「凄いよ、猫の村！」

ティナは初めての体験でテンションが高くなっていた。

「当たり前前の光景ニヤ」

サスケが突っ込む。

「でもすべてが不思議だよ」

ティナが言って皆が笑った。ゴルディバとゴンゴが抱きつきたいのをウズウズしながら我慢していた。ティアナにクギを刺されていたからだ。

村の奥に進み、猫族の城に辿り着いた。そこの宿舎に荷物を置き、王座の間に出向いた。

「猫王^{ニャーミ}太郎様が参られました」

側近の掛け声と共に付き猫に連れられて『太郎』が現れた。

「久しぶりだニャーブラッドと友人達よ」

太郎が声をかけた。サスケと一緒にアメリカンショートヘアの老猫であった。

「久しぶりだな。太郎。体調が優れないようだな。毛並みが悪くなっているぜ」

ブラッドが呼び捨てにしているので側近が怒ったが、太郎が制した。

「ブラッドよ、ワシは歳を取った。もう後何年も持つまい。しかし今『鋼の海賊団』が森を荒らし一大事。寝てもおれん。そんな時にお主達が来たニャ。あの時のように……。何かの導きかもしれん。もう一度ワシらを助けてはくれぬか？」

「その為に俺はここに来た。お前達も協力してくれ。拠点をここに置いて、後は情報が欲しい。飯は『猫マンマ』以外でお願いする」
ブラッドが要求した。

「すまない。そちらの要求は全て受けよう。全面的に協力する。しかし『猫マンマ』は美味しいニャ」

太郎が突っ込む。

「出来ればツナカンにして欲しいな」

ブラッドが要求した。この会話はある意味笑える。

「明日。この森一帯の動物達が集まる『猛獣会議』が開かれる。天敵の犬族や狐族なども加わり、肉食動物・草食動物全ての王達が会議に出席をする。この会議で森の種族を全ての総力を上げて『鋼の海賊団』と戦うかどうか？決議を行うことになっている。ワシはもう動けんからサスケが代わりに出席する事になった。サスケは若い、王たる資質は我輩以上だと思っている。この会議と一緒に付いて行って欲しい。情報も手に入るだろう」

太郎はブラッド達にお願いをした。

「わかった。太郎の願いは断れないだろ」

ブラッドは太郎を見ながら笑った。

「よし今宵は宴会をやるニヤ。夜中まで語らい会おう。ちょうど二十年物の『マタビ酒』が手に入った。美味しいニヤ」

太郎は久しぶりの友人との再会に喜んでいた。

宴会はやはり夜中まで続いた。『猫マンマ』はやっぱり出たが、ツナカンや川魚に鳥などが出た。ちゃんと人間に合わせて調理してくれていた。マタビ酒は人間には余り効果が無いが、アルコール分が入っているため少し酔う事が出来た。ゴルティバとゴンゴは、お酌をしてくれていたメスのペルシャ達に興味身心だ。二人には可愛すぎて、ここは夢の世界であろう。

「元々ブラッドが助けてくれた村だ。遠慮せずに飲んでくれニヤ」
太郎が上機嫌で話した。

「ブラッド達は、この村で何をしたの？」

ティナは暇そうに果物を食べているティアナに聞いた。

「昔、まだブラッドの名前が余に広まっていなかった頃に、私達はアーク大陸に寄ったの。そしてポートギース領のブルトニーに入港したわ。そこには沢山の商船が止まっていた。その殆どが動物を自分の国に密輸する、ハンターばかりだった。アーク大陸には元々先住民が住んでいたけど、二百年程前に西方の4王国がアーク大陸を占領してしまった。その時に殆ど殺されてしまったの。生き残った者は奴隷ね。その奴隷に案内させて、ハンター達は森の動物達を次々と殺したり捕まえたりして行ったわ。猫族だけじゃなく、他の種族もね。太郎も銃弾を浴びて死にかけていた。それを助けたのはブラッドだった。ブラッドは他の動物達に人間というだけで殺されかけたけど、説得して共にハンター達と戦うことにした。その時に開いた会議が『猛獣会議』。そしてブラッドは自ら先頭に立ち、近代兵器を使い絶対的有利なハンター達に立ち向かった。銃弾や砲弾を次々とかわして、ハンター達を倒してついには追い返してやった。それ

以来ブラッドはこの森の動物達の英雄なのよ」

ティアナは説明してくれた。

「猫族だけでなく、他の動物も喋れるの？ 凄いね」

「因みに『赤毛のブラッド』の異名はこの時付いたのよ。嵐のような弾丸をかわしながら、ハンター達を切り裂いた。その時の返り血を浴びたブラッドの髪を見て、ハンター達は『赤毛』と勘違いしたのよ。逃げ帰ったハンター共が西方に帰り、ブラッドの噂を流した。勿論ハンターが歪めて作った悪評よ。私達が西方の国に帰った頃には、『赤毛のブラッド海賊団』として国際第1級指名手配犯となっていたの」

ティアナの説明を聞いて、ティナは同じ人間が許せなかった。それと同時に同じ人間のブラッドを誇りに思った。

「ティアナありがとう。俺も戦うよ。そしてこの森を平和にするんだ！」

ティアナはそんな小さな決意を微笑みながら眺めていた。

次の日の昼に一行は二日酔いで頭を抱えながら村を出発した。

『猛獣会議』は、森の中の古代遺跡『コロセウム』（闘技場）で行われた。鋼の海賊団が発掘している『イサーク遺跡』に程近い場所である。見つかるのでは？ と思っただ、これは動物達の挑戦状でもあるのだろ。彼らの決意を感じられた。

ブラッド一行がコロセウムに付いた頃には、続々と各動物の王が集まってきた。

「凄いよ。キリンに馬に猿や狸。色んな動物が集まっている。露店も一杯あるよ」

ティナが目を輝かしていた。

「ブラッドちよつと見てきていい？」

ティナがブラッドに頼む。

「分かったよ。会議まで時間があるから行って来い。ただ遅れるなよ」

「ありがとうブラッド！」

ティナが喜んだ。しかし何故かゴルディバとコンゴが付いてきた。

「美味しいホットドックあるよ！」

犬族の兄ちゃんが鉢巻きをして売っている。

「草食動物の方に特製野菜スティック売っているよ！」

ヤギが摘み食いをしながら売っていた。

串カツを売っている、牛に豚が文句を言っていた。もう祭りである。

「きゃー可愛い。アライグマ！」

巨体男に抱きつかれてアライグマは迷惑していた。

「可哀想だよアライグマがーゴルディバ・コンゴ」

「まあ彼らの無邪気さが、またいいですよ」

遅れてヒューベリックが付いてきた。

「ヒューベリックも来てくれたの？」

「ブラッドが不安だから付いていつてくれてね」

その時ヒューベリックの携帯通信機『d o u m o』に着信があった。潜入している劉りゅうからである。

劉りゅう はマシューより、携帯通信機を預かっている。バッテリーに魔力を蓄積させて動かすことが出来る。弱点は、魔力が切れやすいのと、通信範囲が狭いということである。劉りゅうは極力連絡を抑えている。

「もしもし劉りゅうコック長、ヒューベリックです。ブラッド船長は今近くにいません」

「分かった。こちらは奴隷に扮して、遺跡に潜入している。奴隷となっているのは、千人程の人間に、数百の動物達。それに海賊団は

五百名ほどいる。他は船にいるのだろ。我々だけでは数が違いすぎるぞ」

「分かりました。ブラッド船長には説明しておきます。我々もこの森の動物達に協力をお願いしております」

「こちらはそんなに連絡出来ない。そちらからの連絡も控えた方がいい。大きな情報が分かったらこちらから連絡する」

劉^{リウ}が指示をした。

「分かりました。ブラッド船長に伝えておきます。気を付けて下さい」

ヒューベリックは電話を切った。

「ブラッド船長に報告する」

ティナとヒューベリック、そして遊びたんなそうなゴルディバ・ゴンゴ兄弟が会場に向った。

会場にはもう沢山の種族の代表が集まっていた。ブラッド達を見つけるのも一苦勞である。ようやくブラッドとサスケ達を見つけて、劉^{リウ}からの報告を伝えた。

「わかった会議が終わったら少し作戦を練らないとダメだな。そろそろ会議が始まるぞ」

円形のコロシアムの中央の闘技場に、五つの巨大な椅子が置かれていた。そこに五人（五匹）の王が現れた。肉食動物代表『ライオン』と『虎』、草食動物代表『サイ』、霊長類代表『ゴリラ』、鳥類代表『鷹』である。彼らは各種族の王でもある。鷹だけは椅子が大きそうである。

「我々猫族はいつも『トラ族』についているニヤ。同じ猫科だからニヤ。天敵の犬族は『ライオン族』についているニヤ。今彼ら五王が森の統制をいるニヤ」

サスケが説明する。

「これより『猛獣会議』を始める！」

議長の『獅子王』が号令をかけた。同時に会場が歓声に包まれた。我々の森は再び、人間どもに荒らされてきている。しかも海賊共だ。再び沢山の同士が死に絶えている。今も奴隷となり、奴らに働かされている同士は数百もいる。それでいいのか諸君？」

ライオン王の声が闘技場をこだました。それと同時に、再び会場から歓声が広がった。

「やつらライオンは自分達の餌が無くなっているから吠えているだ。草食動物もたまったものじゃないニヤ。サイや象などがいるからだ大人しいけど、シマウマやヤギや羊は彼らの声を聞いただけで怖がっている。どっちが敵か分からないニヤ」

サスケが毒づく。ここではマズイだろう？とティナは思ったが、サスケは気にも止めていなかった。

「しかし敵は最新兵器などを使って武装している。我らだけでなんとかなるものかどうか？」

サイ王が意見をいう。

「ふん。臆病者の草食動物など当てにはしておらぬ」

獅子王の一言で会場の草食動物が騒ぎだす。

「しかし計画も無しに突っ込んで行つては奴等の格好の的である。作戦を練らねば。犬死では喜ぶのは死骸を突つつくカラス族のみだ」頭のいい霊長類のゴリラ王がその場を押さえる。

「カラス族だけにくれてやるのは勿体ないな」鷹王がフォローする。

「編隊を組織して、森の中に誘い込み奴等の近代兵器の威力を半減させて、そこを襲うのはどうだ？」

虎王が進言する。

「兵を分断して、数を減らしてどうする。セコイ猫が！」

獅子王の一言で、虎王が牙をむいた。

「俺様を侮辱するの？」

虎王が咆哮する。そこをサイ王とゴリラ王が納める。

「ここで争ってどうする。争うのはこの森から人間共を追い出してからだ！」

鷹王が大声で一喝する。コロセウムが静まり返った。その時である、会場の中から一人の人間が階段を下りて闘技場の真中まで歩いてきた。『ブラッド』である。ティナは息を呑みこんだ。食べられちゃう！

「どこから入ってきた人間よ。我らに降伏して食べられにきたか？」

獅子王が吠える。

「ガキの喧嘩がバカバカしくてね。ツイツイ下りてきてしまった。

『レオ』は子供の躰を忘れたのか？」

ブラッドが獅子王を睨み付ける。

「何故オヤジの名を知っている？」

「おゝお前はブラッド。我らの為に戻って来てくれたのか？」

鷹王がブラッドに話しかける。

「久しぶりだな。ホーク。歳を取ったな、こんな若造に手を焼くとは」

ブラッドが笑顔で鷹王に答える。鷹王の一言で会場が騒然となった。

「あの英雄ブラッドか？」

英雄の突然の登場に会場が歓喜と化した。ブラッドコールが鳴り止まない！

獅子王も口を慎んだ。その会場が静まるのを待って、ブラッドが

「五王」に話しかけた。

「今回の件は、鋼の海賊団という悪名高い人間達の仕業だ。この件は俺達が処理をする」

ブラッドの言葉に会場がまた歓喜の声に包まれた。

「しかしこれは俺達森に住むものと人間との戦いだ。英雄だろうが口をだせん！」

獅子王が咆哮と共に会場を鎮めた。

「なら少しの時間をくれ。その間に俺達が奴等を始末する。その後、もし俺達が負けたらお前達が戦えばいい。人間同士が殺しあうのだ、文句はあるまい」

ブラッドが獅子王以上の気迫で押し戻した。

「ただ、数が違いすぎる、最後には兵を動かして欲しい。お願いする」

今度はブラッドが頭を下げた。

「ならば決議しよう。英雄ブラッドの意見に賛成の者は挙手をお願いする」

最年長鷹王が先導した。『4対1：』獅子王以外は賛成に回った。

「多数決により、鋼の海賊団との対決は一時、英雄ブラッドに託す以上！」

鷹王の言葉に会場は歓喜の渦と化した。

ティナやサスケ達が、コロシアムの中央に駆け寄る。その時、怒りを我慢している獅子王にブラッドが近付いていった。回りの者全てが固まった。怒りに震える百獣の王に近付いているのだ。一発で殺されてしまう。皆息を飲み込んだ。会場は歓喜に包まれているが、その回りの空間だけ時が止まったように音が無くなっていた。

「獅子王よ、父レオは元気か？」

ブラッドが声をかける。

「父は昨年殺された。鋼の海賊団共に！皆を守る為に、鋼の軍団に一人で戦いを挑み殺された。身体に何十もの剣を突き刺されて……。そして俺達の目の前で切り刻まれた。父は俺達に『生きよと』言っただ。だから俺はこの爪でこの牙で、奴等を八つ裂きにしたかった！」

獅子王は苦しんでいたのだ。

「そうかレオは逝ったか！？また大切な友を失ったな…」
ブラッドが獅子王の背中をさする。

「レオは『生きよ』と言ったのであろう。それはお前を一人助けて言ったわけでは無い。お前を王として認めたのだ」
「どういうことだ？」

獅子王がブラッドに問いかけた。

「レオは自分が死んでも、お前が王としてライオン族を、そしてこの森に住む全ての生き物を守る『百獣の王』の称号を継げると信じて『生きよ』と言ったのだ。お前だけを守ったのではない。新しい『王』を守り、この森をお前に託したかったのだ。俺が知っている『百獣の王レオ』はそんな男だ」

ブラッドは語りかけた。獅子王の瞳から涙を溢れた。

「一緒に戦おう！！」

ブラッドの一言で、獅子王の決意が固まった。

「ブラッドと一緒にいると心臓が何回止まるか分からないな。百獣の王に説教たれる奴なんて初めてみたニヤ」

ブラッドが皆の元に戻るとサスケが疲れたように言った。

「あら私達なんて毎日よ。まあそんなところが好きなだけだ」
ティアナがのろけた。

「こいつは昔からトラブルメーカーだからな」
旧友バージがブラッドの肩を組んだ。

「でも凄くカッコよかったよ」

ティナは大はしゃぎである。

「よし今日はパーと宴会とするか」
ブラッドが笑いながら提案した。

「『今日も』の間違いでしょう？」

ティアナが突っ込んだ。

「そうだった？」

ブラッド一行は笑いながら歓喜に包まれるコロセウムを後にした。

その一行を黒い影の集団が森の中から監視していた。ブラッド達がコロセウムを後にすると、黒い集団は森の中に消えていった。

次回「ブルトニー港海戦」お楽しみに。

キャスト

ティナ…赤髪に黒い目を持つ少年、この物語の主人公

ブラッド…「赤毛のブラッド」として海軍・海賊に恐れられている。

海賊船「ルシフェル」の船長

ティアナ…海賊船ルシフェルの副船長兼経理担当。森の種族「エルフ」にしてブラッドの妻

バージ…5人衆の一人。ブラッドの幼馴染。一等航海士として舵を任されている。最強の剣士

ゴルディバ…5人衆の一人。甲板長。巨漢ながら性格は温厚。ただし戦いの時は狂戦士となる

劉^{リウ}…5人衆の一人。コック長。武術の達人。その正体は、シン国の皇太子。

スカー…二等航海士、バージの弟子。槍術の達人

ゴンゴ…副甲板長、ゴルディバの弟。兄と同じ巨漢で狂戦士。可愛い動物、甘い物には目がない。

ヒューベリック…ドクター助手。白魔法・薬学の権威。

テル…ジャンパー国 天皇直属の忍 ティナと友達になる。赤毛のブラッド海賊団のコックとなる。

サスケ…猫王太郎の息子。猫族の王子。側近・・・五右衛門・八兵衛太郎…猫王。ブラッドの戦友でもある。

五王…『獅子王/シンバ』、『虎王/猛虎』、『鷹王/ホーク』、『サイ王/パティオ』、『ゴリラ王/コング』

第12話「ブルトニー港海戦」（前書き）

ブラッド一行が「猛獣会議」に出ている頃、海賊船「ルシフェル」が停泊しているブルトニー港に、ハマーン海賊団が襲い掛かる。果たしてブラッドのいない赤毛の海賊団は港を守ることが出来るのか！？

第12話「ブルトニー港海戦」

四天使の秘宝

〈アーク大陸編〉

第十二話「ブルトニー港海戦」

アーク大陸の先住民が築き上げた古代遺跡『イサーク遺跡』。土に埋もれていたこの遺跡も千人以上の奴隷により掘り起こされ、ほぼ全貌が明らかになってきていた。超巨大な遺跡の壁一面に彫られた彫刻の数々が、古代文明の偉大さを物語っている。森の中に浮かび上がるように築かれた古代遺跡はまさに圧巻である。

その古代遺跡の最上階に会議室を設け指揮を取っているのが、鋼の鎧に覆われた『鋼の海賊団棟梁ハマーン』である。

あらゆる攻撃を跳ね返す、鋼に覆い尽された母船『マルテンサイト』船長でもあり、その他五隻の海賊団を配下に置き、組織して指揮している大海賊である。しかしここに来てハマーンは苛立っていた。

「まだ宝の倉庫は見つからないのか？」

ハマーンは側近に怒鳴った。

「申し訳ございません。奴隷共の動きが鈍く、作業が思うように運びません」

「言い訳など聞きたくも無い。奴隷など死んでもまた徴収すればよい。1年も経つのに見つからんとは何をやっている」

森の奥深くに1年も費やしている。苛立ちは頂点に達しようとしていた。

「それなのですが、我らの偵察隊の報告によれば、ブルトニー港に何やら怪しい船が停泊しているとの事です。ガリオン型の巨大船で、商船には見えないようです」

側近が報告した。

「ほう海軍か？海賊か？我らと戦う算段をしているかもしれんな？
退屈をしていたところだ、その船を破壊して、新しい奴隷を補充することしよう」

ハマーンが暇つぶしを見つけたようだ。

「それと森の種族共が、集会を開いているようです。その中に何やら人間も加わって、作戦を練っているようです」

側近が密偵の報告を告げる。

「知能の無い動物共などどうでもよいが、人間が加わったとすれば、何か反逆の恐れがあるな。これを機に動物共を皆殺しにして、奴らが我らの『食料』という事を認識させねばならん。しかしまずはブルトニーに停泊している船だ。その船を沈めて、町の住民をすべて奴隷にしてやる。女子供もだ。女は選んで俺の物にする。後はお前達が好きにしろ」

ハマーンは上機嫌になった。

「まずは、海で停泊させている、キラ・ダガー・マッドに指示してブルトニーに向わせる。港を火の海にしてやれ。そして奴隷をこの遺跡につれてこさせろ」

ハマーンが支持をする。

「はっ！それで動物共は？」

「楽しみは後で取っておく。早急に進めよ」

ハマーンの指示を聞いて、側近は会議室を後にした。

ブルトニー港に待機を命じられた『ルシフェル』のクルーは、毎日の如く豪遊していた。うるさいティアナもブラッドもいないのである。皆は羽を伸ばしていた。しかし砲撃長スチワート、通信長兼魔術師マシューは遊んではいられなかった。相手は大海賊団『鋼のハマーン』が相手である。準備を怠るわけにはいかない。リーダー格の彼らは、経験を元にあらゆる状況に備えて対策を考えていたのである。妥協は許さない、妥協が命取りになるからだ。彼らの経験

と知性をフルに生かし、対応を考えて準備を行っていた。あらゆるパターンを想定して百通り以上の思わぬ状況にも対応出来るように準備している。勿論その百通りの思わぬ状況を引き起こすのがいつもブラッドである。出来るだけ想定出来る事は準備しておくのだ。彼らも最高のリーダーである。

スチワートは数名の部下に情報収集させて、敵艦隊の居場所、戦力を割り出させていた。

「情報によると、ブルトニー港の南に百五十キロ程南下した海岸に船を停泊しているようだ」

スチワートが地図を開き、副砲撃長マックとマシューに説明していた。

「早速、何名かに調査行かしたところ以下の事が分かった。艦隊は六隻。一隻はこの『ルシフェル』と同じ超巨大ガリオン級の巨大戦艦だ。しかもこの巨大戦艦は鋼で覆われている。ハマーンの母船『マルテンサイト』と断定して間違いないだろう。その他の五隻の旗を見てもビツクリする。ガニシヤ大陸の南側一帯を暴れまわった。

『ドクロに猛獣爪』のマーク、『キラ』、『ダガー』猛獣兄弟の二隻。一晩で港を火の海と化した。『ドクロに炎』のマーク、炎の魔術師『マッド』。数分の間に、人を芸術的に殺す。『ドクロに砂時計』のマーク、冷徹な殺し屋『ハイド』。一瞬の間に十隻もの海軍を海の底に沈めた。『ドクロに鮫』のマーク、海の支配者『アビス』。すべてが国際第一級の海賊だ」

「なんでそんな奴らが、ハマーンの軍門に下っているのかわからない」

マックが嘆く。

「それ程ハマーンの力が巨大だという事であろう」
マシューが冷静にいう。

「しかし我らは奴らと戦わねばならない。奴らが巨大であるならば、

『裏』をかいてやればよい。何もまともに遣り合わなくてもいいだろう。」

マシューは最高位の魔術師でもあるが、彼の豊富な知識は軍師としても力を発揮する。

その時である、ルシフェルに搭載されている固定魔道通信機『MTT』（Magic Telegraph and Telephone）が鳴った。偵察に向わしているクルーからである。

「もしもどうした？」

スチワートが話した。

「砲撃長、今ハマーンの艦隊が三隻北上して行きました」

偵察に向ったクルーが報告する。

「何？どの船だ？」

「『ドクロに爪』のマークの船が二隻、『ドクロに炎』のマークの船が一隻です」

「キラーとダガーとマッドだ！」

ニックが叫ぶ。ルシフェルのブリッジが静まり返った。

「お前達は引き続き監視をしてくれ。こちらからもまた連絡する。」

「最悪の状況だ。ブラッドは五人衆一人で一隻と言ったが三隻もいるじゃないか。」

ニックが嘆く。

「それはどうかな？戦力を分散したという事は、こちらはチャンスかもしれない」

マシューは不適な笑みを見せた。

『ドクロに猛獣爪』のマークの海賊船二隻『バイソン』・『シーザー』はマストを広げ北上していた。その少し後ろに『ドクロに炎』のマークの海賊船『ヒドラ』が付いてきていた。海賊船『バイソン』

の船上には、『キラ』と『ダカー』兄弟が乗っていた。

「何だつて『ハマー』は『マッド』なんて付けるのだ。俺達だけで十分だ！」

大きな牙がある獣の毛皮をきている弟ダガーが声を荒げる。まさに猛獣の如くである。

「ボスは火の海にしろとの命令だ。マッドの炎が必要なだろう。それにブルトニーに出している偵察隊が、怪しい巨大戦艦を発見している。万が一の事を考えての戦力配置だろう」

兄のキラも獣の毛皮を着ているが、弟と違い冷静だ。

「火の海など、俺達三百人の猛獣部隊によつて直ぐにでも火の海にしてくれる。その怪しい船ごとな！」

弟ダガーが吠えた。

その時である。後方から大きな炎の球が飛び込んできた。危うくダガーに炸裂するところであつた。とつさに避けたダガーはまさに野生の感であろつ。火の玉は甲板を粉碎するかと思われたが、その『火の玉』は空中で動きを止めて、そのままゆっくりと着地した。その炎から現れたのが炎の魔術師『マッド』だ。

「やあお二人方、何やら俺の噂かな？」

紳士的な口調でマッドが挨拶した。

「危ないだろ。さては俺を殺すつもりだったな！」

ダガーが叫ぶ。

「かわすと分かつていたから、ここに下りたですよ。まさかこんな鈍い炎をかわせない幹部がいるはずがないと思ひましてね」

「何？」

血の気が上つた、ダガーが剣を抜いた。

「止めろ！馬鹿者！」

兄キラが一喝する。ダガーが怯んだ。

「マッドも悪ふざけがすぎる」

キラーがクギを刺す。怖ろしい容姿の割には冷静だ。

「それで何のようだ」

「あんた方がさっさと出港してしまうので、作戦も決めていなかった。それでわざわざ出向いてあげた訳です」

あくまでも紳士的な態度である。風貌からしても紳士である。

「作戦などいらぬ。港にいる住民どもを捕らえて港を焼け野原にするだけだ！」

「嫌ですね。野蛮な人は。少しは計画も練られないと」

「何？」

「何か問題でもあるのか？」

飛びかかるうとするダガーを制して、キラーが問う。

「問題があるとすれば港にいる巨大船ですね。港は俺達が占領してから商船などは一切立ち寄りなくなりました。それなのに超巨大船が入っているという事は、何か意図があるのは間違い無いでしょう。それを無暗に突っ込んだらバカですから」

マッドの一言で、またダガーが叫ぶ。

「たかが一隻に何を恐れるのだ。臆病者。圧倒的に数が違うのだ。兵力の差とパワーで押さえればいいのだ！」

ダガーの一言で溜息を付きながらマッドは話した。

「敵の戦力も知らないで突っ切るのは無駄に兵士を削ぐだけです。兵法の初歩の初歩ですよ。奴らがどのような武器を持っているかも分からない。魔法使いがいるかもしれない。仮に私が敵ならばこの船を一発で海の藻屑とする事が出来るのですよ」

マッドの瞳に魔力が宿った。その瞳にダガーは身動きが取れなくなかった。

「いい加減にしろ！二人とも戦いの前だ。慎め」

キラーが制する。冷静である。

「現段階では情報が少ない。『バイソン』（キラー）と『ヒドラ』（マッド）が港に入り、港の状態を見ながら攻撃を仕掛ける。『ジーザー』（ダガー）がバックアップだ。文句はあるまい」

キラーが支持をする。マッドは頷く。しかしダガーが喚く。

「どういうことだ？兄じゃ？俺がバックアップとはどういうことだ？」

ダガーは納得がいていない。

「敵が何処にいるか分からない。しかも敵を港から逃がすわけでもない。だからバックアップが必要なのだ」

「そんなのマッドにやらせる！」

「マッドの魔力と我らの突進力が必要なのだ。お前は湾の中から一人も逃げられないようにフタをしる。絶対一人も逃がすな！」切れきれモードのキラーの迫力にダガーも渋々納得した。

ハマーン艦隊の三隻は、夕方にはブルトニー港外に到着した。そのまま『シーザー』（ダガー）を待機させて、『バイソン』（キラー）と『ヒドラ』（マッド）の二隻は、港内に入っていた。しかし……。
「おかしい。港が静か過ぎる。どういう事だ？しかも巨大船など何処にもいない」

「全員警戒しろ。」

キラーが緊張を伝える。

その時である。港内の奥に入りこんだ海賊船の背後から大砲が打ち込まれた。スチワートに指示で湾入口の二つの灯台に大砲を設置していたのだ。スチワートに鍛えられた砲撃員による的確な砲撃である。『ドカーン』という破壊音と共に船尾にある舵を的確に打ち抜いた。

舵を失った、二隻は身動きが取れなくなった。

「図られた！後方の大砲を破壊しろ！」

キラーが指示した。すると静かだった港から住民が津波の如く押し寄せ、銃と大砲を次々と撃ちはなった。

突然の住民の反撃に、舵を失った海賊団は狼狽した。住民とはいえ

数千もの人数である。元々海賊の恐怖によって押さえつけていたのである。人数では圧倒的に数が違う。

スチワートが海賊団に対抗する為に、住民達に思いを伝えて賛同してもらったのだ。

決め手は『自分達の自由を取り戻すのは今しかない。立ち上がる！』である。その一声で住民達に力を与えた。もちろんパン管長の強力があつてのことである。

小さな力でも団結すれば大きな力になる。十分意味のある彼らの勇気である。

港内の異変に気付いたダガーは、慌てて母船『シーザー』を港内に移動させようとしていた。

しかしその時である岸の陰に隠れていた海賊船『ルシフェル』が『シーザー』に一成射撃を行った。

突然の砲撃にダガーを含めて、クルーは狼狽した。次々と放れる砲撃に『シーザー』は身動きが取れなくなった。元々戦力は『ルシフェル』の方が圧倒的に上である。勝敗は一気に付いた。

そして『トドメ』には、マシューの黒魔法による巨大な炎の球攻撃である。炎系最大魔法『ファイヤーボム』である。これにより『シーザー』は炎上して、海の藻屑と消えていった。

ダガーのような猛獣海賊団は、陸戦において威力を発揮する。彼らは戦わずして負けたのである。冷静なキラーがダガーを下げたのは正解だが、マシューはそれを超える策を練ったのだ。まさに作戦勝ちである。

港内の身動きが取れない海賊船は標的となり劣勢となっていた。船は砲撃により大破して海賊共は混乱していた。しかしキラーは『

砲撃』と『上陸』の2部隊に分けて編制した。百戦錬磨の経験が的確な指示を与えた。

その指示を見た炎の魔術師マッドは、呪文を唱えマシューと同じ魔法『ファイヤーボム』を岸にいる住民達に炸裂させた。一瞬にして数百もの住民を火の海に包んだ。時間稼ぎである。

炎の中で泣き叫ぶ住民を見て、他の住民が恐怖した。そして恐怖により逃げ惑う住民が出てきた。こうなると収集が付かなくなる。パン管長をはじめ港内関係者が落ち着かそうとするが、恐怖が恐怖を呼んで混乱が収まらない。

その混乱に乗じて、猛獣海賊団がボートに乗り次々と上陸した。これからは一方的な殺戮の始まりだ。逃げ惑う住民を次々と殺しまく、死体の道が切り開かれた。

形勢が変わった海賊団は大砲を撃ちまくり住民の死体の山が築いた。「住民共が、舐めたマネをしやがって。皆殺しだ!」

キラーも猛獣の本能が出ていた。その時である、背後から激しい砲撃が飛んできた。住民打つ砲撃とは比べ物にならないくらい強力で正確な砲撃である。

「砲撃だと? バカな? ダガーは何をやっている!」

キラーは振り返って驚いた。そして目を疑った。

「『ドクロに6本の黒い羽』のマスド! 『ルシフェル』だと! 『赤毛のブラッド海賊団』!」突然の大物海賊団に、キラーがひるむ。

「停泊をしていた巨大船とは『ルシフェル』という事ですか? 通りで準備がいいわけですね」

あくまで紳士なマッドが分析した。

「こんな大物を殺せるとは、付いていますね私は」

マッドは炎の呪文を唱え、海賊船『ヒドラ』の上空に超巨大な球状の炎の球を出した。『ファイヤーボム』である。炎の球は『ルシフェル』に向って物凄い勢いで飛んでいった。

巨大な炎の球が『ルシフェル』に直撃する直前に、港内の『水』が盛り上がり巨大な壁となった。その水の壁が炎の球を飲み込み消滅させた。

「何？どうなっているの？」

紳士的だったマッドが狼狽した。計算外の事が起きたエリートというのは、頭で考えられなくなるとパニックになりやすいのだ。

『水』の壁は魔術師マシューによる『水』の絶対防御魔法であった。

「若造が攻撃魔法だけに力を入れて、防御魔法のイロハも知らないように思われる。だから船もボロボロになるのだ。『ルシフェル』が無傷を続けているのはこの絶対防御魔法のおかげじゃ。まだまだ修行が必要だな」

マシューがスチワートに説明する。

「しかしこれ以上の殺戮は許せないのう」

マシューは呪文を唱え始めた。すると『ルシフェル』の頭上にマッドが作った『ファイヤーボム』の倍以上もする大きな巨大な『火の玉』が出現した。

「バカな？こんな大きさ？助けて！」

炎の球を見た、マッドは混乱して我を忘れた。その姿は紳士とは程遠い姿であった。

その超巨大な炎の球が、『ヒドラ』に直撃して、大爆発と共に沈んで行った。

その光景を見た住民達は驚きと歓喜と共に息を吹き返し反撃に転じた。

隣の炎に包まれる『ヒドラ』を見ながら、キラが絶句した。自分達の爪の甘さが今頃になって分かったのだ。この勝敗を分けたのは、情報量と組織力の差である。突然『港』に攻め来られたら、い

かに『ルシフェル』といえども負けていたかもしれない。しかし事前に情報を集めて、敵戦力を分析して作戦を立てた。しかも住民を味方の付けたのである。チームワークも悪く、敵分析も怠った。組織など烏合の衆と一緒にある。

『ルシフェル』は船首を『パイソン』船尾にぶつけた。その後、甲板員の『狂戦士』部隊が敵船に乗り込んだ。

『猛獣部隊』と『狂戦士』部隊の戦いである。戦いは壮絶な殺し合いである。しかしそこに航海士部隊（剣士）が加わり、形勢は有利となった。元々『猛獣部隊』の半数は、上陸しているので人数的には少ないのである。勝負は決した。しかしトップ（船長）を抑えなければならぬ。スチワートがキラの前に立った。

「どうした。もう後が無いぞ」

スチワートがキラを追い詰めた。

「貴様がブラッドか？ 予定外だがお前を殺して首をハマーンに献上してやる！」

「残念ながらお前のような『三下』にブラッドは会わない。残念だったな」

スチワートが凄む。駆け引きだ。キラは国際第一級に名を連ねる大物である。対局においていかに自分を『有利』に持ち込むかも作戦である。

「おのれ！ 俺を愚弄するつもりか？ 肉片の一つも残らず切り刻んでやる！」

キラは切れた。スチワート作戦通りである。キラは手持ちのアクスを両手に構え襲い掛かった。

早い！ スチワートはギリギリかわした。しかし次々と嵐の如く斧が襲い掛かった。スチワートは追い詰められた。

交わしきれない！ キラの斧が振り上げた瞬間。スチワートは腰から銃を引き抜いた。

『ドン』『ドン』『ドン』と三発連発した。新兵器『リボルバー』

である。単発式の銃が多いこの時代には活気的な武器である。ガラクタからよくこんな新兵器を作るのか？驚かされる。

銃弾はキラの心臓と脳天を打ち抜いた。キラは絶句しながら斧をスチワートの頭上で手元から離れた。そしてそのまま仰向けに倒れた。

間一髪であつた。そこに副砲撃長ニックが駆け寄つた。

「大丈夫ですか？隊長！」

「遅いぞニック。死ぬところだつた」

スチワートが笑顔をみせて立ち上がった。

「申し訳ありません。しかし快勝です。」

スチワートとニックが、炎が上っている港を眺めた。

「快勝とはいえない。大きな被害が出た。」

「しかし彼ら住民が自分達で立ち向かつた。それが次に進める勇気となるのだ。勇気の一步が、また大きな一步でありそれが一番大切なのだ。」

炎を眺めながらスチワートがニックに語つた。

自軍の敗戦を知り、猛獣部隊は武器を下ろして投降した。住民達の勝利である。今まで押さえつけられた恐怖からの解放にされた住民は、喜びの歡喜に溢れた。暗闇から未来の光が差し込んだのである。

次回「猛獣達の逆襲」をお楽しみに。

キャスト

ティナ…赤髪に黒い目を持つ少年、この物語の主人公

ブラッド…「赤毛のブラッド」として海軍・海賊に恐れられている。

海賊船「ルシフェル」の船長

スチワート…5人衆の一人。砲撃長。最高の狙撃手。新兵器開発が趣味

マシュー…5人衆の一人。通信長兼ドクター。白・黒魔術の最高位の魔術師。趣味の新魔術の研究

ニック…副砲撃長、狙撃手。スチワートと同じで新兵器開発が趣味
ハマーン…鋼の海賊団棟梁。鋼の鎧覆われている。大海賊

キラ（兄）…猛獣兄弟と恐れられている。今はハマーンの傘下に入っている。

ダガー（弟）…猛獣兄弟と恐れられている。兄のキラが冷静であるに対して、弟は単純である。

マッド…炎の魔術師と恐れられた海賊。今はハマーンの傘下になっている。常に紳士を装っている。

第13話「猛獣達の逆襲」(前書き)

ブルトニー港海戦により一気に緊張感が増した赤毛のブラッド海賊団、決戦の日は刻々と近付いてきていた。

第13話「猛獣達の逆襲」

四天使の秘宝

くアーク大陸編く

第十三話「猛獣達の逆襲」

ブルトニー港海戦での敗北を、ハマーンは『イサーク遺跡』の最上階会議室で報告を受けた。

「何？全滅だと！」

ハマーンが驚愕する。

「あのバカどもが何をしておったのだ！」

ハマーン海賊団の約半分を失ったのである。信じられない思いである。

「報告によりますと、港内に突然『赤毛のブラッド海賊団』が現れたそうです」

側近が報告する。

「何？『赤毛のブラッド海賊団』だと？」

ハマーンは自分と同等クラスの大物海賊団の登場に驚いた。しかも民衆と共に自分に敵対しているのである。

「何が起こっているのだ？」

ハマーンは激怒していた。戦力が半減している、しかも相手は『赤毛のブラッド海賊団』である。状況は思わしくない。情報が少なすぎたのである。ハマーンはここにきて戦力分散の愚かさを知ったのである。情報を掴んでいたら戦力を分散させる事はしなかったであろう。自分の決断の甘さを悔いた。

「ここで俺がいても仕方があるまい。直々に指示してブラッドに借り返してもらおう。『ハイド』をこちらに呼びよせよ。『アビス』」

はワシが船に戻るまで待機させろ」

ハマーンが指示を与えた。

その時である、発掘作業を進めている部隊長が慌てて会議室に駆け付け報告した。

「報告があります。地下の発掘部隊より連絡あり、地下の倉庫の扉を見つけたとの事です」

「ふふふ。ついに見つかったか？流れが変わったな！これで『赤毛のブラッド』など恐れるに足りぬ」

ハマーンの瞳の野望の炎が灯させた。

その会話の一部始終聞いていた者がいた。テルである。ハマーンの食事係の雑用として使われていたのである。

テルは劉りゅうに報告に戻った。

スチワートからの報告をブラッドは、猫族の村『キャッツ』の王座の間で聞いた。

「分った。お前達の働きには感謝する。よく港を守ってくれた。ありがとう。こちらもすぐ動き始める。お前達は支持があるまで戦いの疲れと整備に専念してくれ。それからハマーンの手下も俺たちを警戒するだろう、情報収集を怠るなよ。それとマシュー達魔法使いをすべてこっちに向かわせてくれ」

ブラッドはそう告げて、魔導通信機『doumo』を切った。

「話は聞いての通りだ。スチワートとマシュー達が、ハマーン海賊団の三艦隊をブルトニー港で撃破した。これによりハマーン海賊団

の戦力は半減した」

ブラッドの一言でその場にいた者すべてが喚起した。

「さすが『赤毛のブラッド海賊団』。このままの勢いで『イサーク遺跡』で奴隷となつて働かされている同胞達を助けるニヤ！」

興奮したサスケが大声を上げる。

「焦りは禁物だ。ハマーンはこれから警戒してくるだろう。こちらも引き締めないと逆にやられるニヤ」

王座に座っている太郎が戒める。

「その通りだ。俺たちの計画である奇襲は、相手が油断しているから効果を発揮する。相手が警戒しているとそれが難しくなるのだ。計画の練り直さなければならぬ。奴隷となつてしまった人達を傷つけるわけにはいかないからな」

「太郎、申し訳ないが猛獣会議をもう一度開けるように打診して欲しい。ハマーンの情報部が潜んでいるかもしれない。内密にな」

ブラッドが太郎に頼む。

「わかったニヤ」

太郎が了承した。

ティナは潜入しているテルと劉りゅうが心配であつた。ハマーンの警戒が強くなると彼らが危なくなる。

「気を付けて」

ティナは心から祈つた。

『イサーク遺跡』は巨大な要塞のようなものである。その要塞を取り囲むように巨大な石の壁を作っていた。その壁の内側と遺跡の間に無数の檻が設置されており、奴隷はその中に詰められていた。

檻の一つ一つに警備を付けられており、逃げだせる状態ではない。テルは檻に戻り、劉りゅうに現状を報告した。勿論他に会話を聞かれる分

にはいかない。数力国語を話せる、テルが『シン国』の言葉で話した。

「そうかスチワート達がハマーン艦隊を打ち破ったか。しかしこれで余計警備がきつくなるな。ブラッドと連絡を取ってみる。テルは引き続き遺跡の中を調べてくれ」

劉^{リウ}が指示を与えた。

第二回の猛獣会議は獅子王の居城『獅子城』で行われた。猫族の城とは違い立派なお城である。元々人間が作ったお城ではあるが、十数年前にブラッド達がハンター共を蹴散らした時に勝ち取った戦利品である。

「皆さんに集まって頂いたのは、ハマーン海賊団と戦うための作戦を立てるためです」

ブラッドが唇を切った。

今回集まったのは、『獅子王』『虎王』『サイ王』『ゴリラ王』『鷹王』の五王に加え、呼びかけをした『猫王』太郎とサスケである。

各王に加えてブラッド・ティアナ・ゴルディバ・コンゴ・ヒューベリック・ティナが参加した。

敵の情報漏れを恐れて、少数会議となった。

「ハマーン海賊団の内、三隻の艦隊を私の部下が打ち負かした。これで奴らの戦力は半分となった」

ブラッドが報告すると、各王から歓声が上がった。

「しかしこれにより奴らの警戒がより強くなる。これからは緻密な計画が必要だ」

ブラッドが皆を引き締めた。そして会議室の中央にある円卓の卓上にある地図を見ながら作戦を説明した。

「奴らは遺跡の回りを大きな石の壁を作っている。この壁は簡単には打ち破れない。そこで我らが誇る魔術師軍団の力を使う。まず五部隊に分かれる事にする。『肉食動物』二部隊、『草食動物』一部隊、『霊長類』一部隊、『鳥類』一部隊である。各部隊の指示は五王にお願いしたい」

ブラッドの指示に各王は頷いた。

「各部隊は五ヶ所に分かれて貰いたい。ちょうど遺跡を取り囲む『五芒星』のように配置します。正面が獅子王率いる『肉食動物』、正面から右斜め下には虎王率いる『肉力動物』、左斜め下にはゴリラ王率いる『霊長類』、右下にはサイ王率いる『草食動物』、左下には鷹王率いる『鳥類』です。よろしいですか？」

ブラッドは地図を広げて丁寧な説明に各王が頷く。

色々な失敗と呼ばれる多くが、意思の疎通が出来ていない事が多い。挙句の果てには、行き違いや他人悪口となり統制が取れなくなるのである。皆が同じ方向を向くには、意思の疎通が不可欠である。ブラッドはその重要性を知っている。他人なら特に必要なのだ。だから最初に彼らが分かるまで丁寧に説明するのである。

「各部隊に我々の魔術師軍団を付けます。合図と共に、魔術師軍団が壁をぶち破りますので、そのまま突入して下さい。奴隷の中に私の部下が潜入しております。作戦が始まったら塞内で反乱するように指示しておきます。外から中から彼らを混乱に陥れます」

ブラッドの説明に五王は納得した。

その時である、魔術士ヒューベリックの携帯魔道通信機「dou mo」に連絡が入った。潜入している劉じゅうからである。

「もしも劉、今会議中です。もう少し後に出来ませんか？」

「いや彼は中々身動きが出来ない。代わってくれ」

ブラッドが携帯を受け取った。

「劉りゅうすまないな、今五王達と会議をしている、決戦は近いぞ」

「ブラッド船長、遺跡周辺の警備が厳重になっております。遺跡内に進入しているテルから聞いて、ハマーンの三艦隊を撃破した事は知っております。それとハマーンは『イサーク遺跡』の宝を発見したようです」

劉りゅうは一通り説明した。

「分かった決行は3日後にする。太陽が真上に上った正午に、動物部隊と五方向から攻撃を仕掛ける。劉りゅうはそれまでに奴隷になっている住民に知らせて反乱の準備をしてくれ。内からも混乱を誘う」

「分かりました。準備をしておきます」

「気をつけてくれ慎重に頼む、何処で情報が漏れるか分からない」

「了解です」

そのまま連絡が切れた。ブラッドは携帯をマシユーに返すと五王に話しかけた。

「お聞きの通りです。敵も警備を強化して私達の攻撃に準備しております。なので内外で混乱を誘い、その混乱に乗じて『イサーク遺跡』に乗り込みます。敵は宝を見つけたと言っております。時間がありません。3日後の正午に決行したいと思います。各王は準備を進めて下さい」

ブラッドの説明に五王も頷く。

会議が終わり、各王が退出した頃に、1人（1匹）の子供のライオンが会議室に入ってきた。

「お父様、この方がブラッド様ですか？」

「エースか、そうだ彼が我らの英雄ブラッド船長だ。お前のおじい様も彼に助けられたそうだ」

「ブラッドよ、我が息子エースだ。貴方の大ファンなのだ」

「初めましてエースです」

エースはテレながらブラッドに近付いてきた。

「エース王子、お初にお目にかかります。『赤毛の海賊団』船長のブラッドと申します。お見知りおきを」

ブラッドは若き王子に深々と頭を下げた。

「頭を上げて下さい。ブラッド船長。貴方は私の憧れでもあり、英雄なのです。貴方の話は子守歌のように聞かされていました。アーケ大陸の全ての動物達の英雄なのです」

「私はそれほど偉くは無いですよ。道を開いたのは貴方方の先人達です。私は少しお手伝いしただけですよ」

ブラッドは微笑みながらエースと話した。

「今度の戦いもそうです。貴方のお父さんの背中を見て王のリーダーシップと言うものを学んで下さい。それは国を治める者として一番重要な事です。常識じゃない何かを感じて下さい。それは貴方が王となる使命なのです」

ブラッドの言葉にエースは感動を隠せない。

「はい！ありがとうございます」

ブラッドは頭を下げて会議室を後にした。

「エースよ、彼のような英雄になりなさい。百獣の王とは我ら一族だけの王ではない。この森に住む全ての動物の王とならねばならぬ」

「はい。お父様」

部屋を後にするブラッドを見送りながらエースは父とブラッドの言葉を繰り返した。

三日後、ブラッド達と森に集まる全ての動物が『イサーク遺跡』の森の中を取り囲んだ。正面にはライオン王が指揮をとる『肉食動物』軍団が終結していた。

ブラッド達一行は獅子王と共に正面から突撃する。メンバーはブラッド・ティアナ・ゴルディバ・コンゴ・マシユー・ティナである。サスケを中心とした猫族部隊も正面から攻撃をしかける。その他の部隊には各魔術師が三名待機させている。『イサーク遺跡』を取り

囲む壁を打ち破る為の切り札である。

正午…太陽が真上に上った。

「ブラッド船長。いよいよですね」

「エース王子。気を付けてください。これからは戦場です」

「分かっております。貴方達の勇姿を目に焼き付けます」

エースの瞳を見てブラッドは優しい笑顔で彼の毛皮を撫でた。

そして振り返り『イサーク遺跡』を見据えた。その瞳は『戦士』の目となっていた。

「さあ決戦だ！」

真上に上った太陽が森の出口に光を与えた。戦いを待つ数百の動物達は、ブラッドを背に『イサーク遺跡』を見据えた。

次回、『決戦！イサーク遺跡』をお楽しみに。

キャスト

ティナ…赤髪に黒い目を持つ少年、この物語の主人公

ブラッド…「赤毛のブラッド」として海軍・海賊に恐れられている。

海賊船ルシフェル船長

ティアナ…海賊船ルシフェルの副船長兼経理担当。森の種族「エルフ」にしてブラッドの妻

バージ…5人衆の一人。ブラッドの幼馴染。一等航海士として舵を任されている。最強の剣士

ゴルディバ…5人衆の一人。甲板長。巨漢ながら性格は温厚。ただし戦いの時は狂戦士となる

劉^{リウ}…5人衆の一人。コック長。武術の達人。その正体は、シン国の皇太子。

ゴンゴ…副甲板長、ゴルディバの弟。兄と同じ巨漢で狂戦士。可愛

い動物、甘い物に目がない。

ヒューベリック…ドクター助手。白魔法・薬学の権威。

テル…ジャンパー国 天皇直属の忍 ティナと友達になる。赤毛のブラッド海賊団コックとなる。

サスケ…猫王太郎の息子。猫族の王子。側近…五右衛門・八兵衛太郎…猫王。ブラッドの戦友でもある。

五王…『獅子ノシンバ』、『虎王ノ猛虎』、『鷹王ノホーク』、『サイ王ノパティオ』、『ゴリラ王ノコング』

ハマー…鋼の海賊団棟梁。鋼の鎧覆われている。大海賊

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6693h/>

四大天使の秘宝

2010年10月9日12時53分発行